
仮面ライダーW ～罪を燃やすB～

ごまだれ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダーW 〽罪を燃やすB〽

【Nコード】

N1666V

【作者名】

ごまだれ

【あらすじ】

俺の名前は藍川和哉。風都で起こるガイアメモリを使った事件に立ち向かう鳴海探偵事務所の探偵。翔太郎さんやフィリップさんの助手として、日夜頑張っています。体を鍛えるのだって、かかしたことはないです。……え？仮面ライダーですか？勿論翔太郎さんとフィリップさんが仮面ライダーW。照井さんが仮面ライダーアクセルに変身しますけど。俺？いえ、変身しませんけど、なにか？※この小説は作者が勢いで始めてしまった為、非常に更新が遅いです。なるべく週一は目指しますが、難しいかもしれません。※原作は仮

面ライダーWですが、もしかしたら他の作品とのクロスオーバーをしたりするかもしれません。

Aは戦う／助手はただ一人（前書き）

勢いで始まりました。詳しいキャラ紹介など、するかは未定。

Aは戦う／助手はただ一人

以前とある事件をきっかけに、大破。少し前に再建されたその第二風都タワーが見下ろすエコの街『風都』。

平和なこの街は、以前はガイアメモリと呼ばれる代物で人間が変身した怪人、ドーパントによる事件が多発していた。

今でこそ、その事件は確実に減少傾向にあるものの、やはり後を絶たないのは事実。

だがそれでも、この街には英雄ヒーローがいる。ガイアメモリを製造、販売していたミュージアムという組織を壊滅させ、ドーパントによる犯罪を防ぐために戦う英雄。

俺を含めた街の人達はその人達をこう呼ぶ。

仮面ライダーと。

……まあ、俺は余り仮面ライダーは好きじゃないんだけどね。

* * * * *

「ちわーす」

いつものように俺がドアを開けると、既に事務所内には翔太郎さんとフィリップさんがいた。

「おお、来たか。和哉」

左翔太郎。この鳴海探偵事務所の探偵の一人。元所長らしいけど、詳しくは知らない。

フィリップさんや所長曰く、ハーフボイルドらしい。最初は意味が分からなかったけど……。今は正直その通りだと思う。そんな所を含めて、俺はこの人を尊敬しているけれど。

「早いですね。お二人とも。まあ、此处に住んでいるんですから、当然と言えば当然ですけど」

「それを言うなら和哉。君も大分早いね」

フィリップ。翔太郎さん同様、この事務所の探偵の一人。正確には翔太郎さんと二人で一人の探偵。

やっぱり詳しくは知らないけれど、地球の本棚と呼ばれる物を持っていて、大量の知識が脳内に詰まっているとか。基本的に翔太郎さんが走りまわって情報収集。その情報を元にフィリップさんが検索をして、というのが二人の行動の基本。

「まあ、助手ですから」

そして俺こと藍川和哉。かれこれ一年以上翔太郎さんとフィリップさんの助手兼探偵見習いです。

年齢は17。性別は男。身長175cmで体重64kg。入所理由は……まあ、きっかけを語ると長いので簡単に言いますと、翔太郎さんとフィリップさんが仮面ライダーWに変身した所を見たからです。その翌日にドアを叩いて入所させて貰いました。

「そう言えば翔太郎さん。ポストの所に何か入ってましたよ？」

「あん？」

「どぞ」

近づいて行ってポストに入っていた茶封筒を翔太郎さんに手渡す。封筒を開け始めるのと同じタイミングに事務所内の電話が鳴り、慌ててその電話を取った。

「はい。鳴海探偵事務所」

『藍川か？』

「その声は照井さん。ご無沙汰してます」

照井竜。階級は警視で、風都署超常犯罪捜査課のトップ。赤いジャケットがトレードマークで、鳴海探偵事務所の所長こと、鳴海亜樹子さんを嫁に貰った方。鳴海探偵事務所のお得意さんでもあり、翔太郎さんとフィリップさん同様に仮面ライダー、彼は仮面ライダーアクセルに変身する。口癖は「俺に質問するな！」。

「何か依頼ですか？」

『俺に質問するな！』

「相変わらず無茶苦茶ですね!？」

言うだけ無駄なのでもう諦めの境地だが。

「依頼でしたら直接おいでになって頂けるとありがたいです。そうでないのなら、此方が署の方に出向きますが」

『なら今から言う住所に向かうように、左に伝えてくれ』

照井さんが言う住所を近くのメモ用紙に書き込んでいき、その後、少し言葉を交わしてから電話をきった。

視線を翔太郎さんの方に移すと、茶封筒の中身らしき書類を机に置き、既に此方を見ていた。

「照井はなんだって？」

「何やらお仕事の依頼みたいですよ。多分ドーパント絡みです。そちらは？」

「何時ものだ。三丁目の佐々野さん」

「また逃げられたのかい？ 実に興味深い。何故そんなにその家の猫は逃げだすんだろうね」

「飼い方に問題があるのかと。とりあえず佐々野さんの猫探しは俺がやりますから、翔太郎さんは照井さんの方をお願いします。これ、住所です」

翔太郎さんにメモを渡す。それから翔太郎さんから茶封筒に入って

いた書類を受け取って軽く目を通した。
普段となんら変わらない猫の資料が書いてある。

「じゃあ、いってきます。翔太郎さん。フィリップさん」

「ああ。行って来い」

「和哉。その前に良いかな？」

ドアから出ていこうとした所を、フィリップさんに呼びとめられた。

「何でしょう？」

「君の『アレ』。そろそろ修理が終わるけど、それが終わってから
でもいいんじゃないかい？」

「本当ですか!!……ああ、でもペット探しに『アレ』は必要無い
でしょうから、さっさと行って、佐々野さんちの子を見つけてきち
やいますよ。戻ってきた時の楽しみにしておきます」

「そうかい？」

「はい。では、改めていってきます」

頭を下げ、俺は事務所を飛び出した。

「翔太郎。本当に面白いね彼は。君もそう思わないかい？」

「思わねえ。まあ、亜樹子より有能な助手ではあるが」

「彼はもう何度も、ドーパントと遭遇している。それは君と一緒に
時もある、君がいなくて一人だけの時もあった。普通の子ならと
ついに辞表を提出していてもおかしくないよ?」

「あいつは俺達と同じようにこの街が好きなんだだけだ。だからその街を守りたい。その為にあいつは此処にいる」

「ああ、そうだね」

「俺もそろそろ現場に行くぜ。そうしないと和哉に怒られっちまうからな」

「相変わらず助手には頭が上がないんだね、翔太郎」

「そんな事ねえよ！」

*
 *
 *
 *
 *
 *

三丁目の佐々野さんこと佐々野理枝さんと言えば、あの事務所の中では猫探しを意味している。

というのも、佐々野さんの飼い猫、ポーちゃんは恐らく飼い主が嫌いなのだろう。しょっちゅう家出するからだ。

「だって、なあ」

仕事が終わってポーちゃんを家に連れていく事もあり、何度か佐々野さんの家に行った事がある。依頼を態々封筒に入れていくくらい人見知りで無口な人。でも凄く美人。というより美少女。後で聞いたら、俺と同じ年らしい。

それだけでも高根の花的な所なのに、出不精というか引きこもり気味な所もあって、人と接しないから、ポーちゃんしか友達がいなかったのかと思う程だ。

「佐々野さん、前に持って行った猫の飼い方のマニュアル読んだのか？……多分読んでないだろうな」

ポーちゃんを溺愛しているせいで、ポーちゃんが嫌がっていてもそれでも構いに行くから逃げられるのだ。それでも何度逃げてもその度に依頼をするのは、本当にポーちゃんが好きなのだろうと言う事もまた分かる。

ならポーちゃんの事もっと考えてあげればいいとは思っただが。

「まあ一応話を聞いて、それから猫探しだな」

そんな事を呟きながら、俺は佐々野さんの家の前、風都でもトップクラスの高級マンションの入り口に立った。既に覚えてしまった部屋番号を押し、暫く待つ。

……はて？

「留守か？」

佐々野さんが家にいないなんて、明日は季節外れの猛吹雪か？

「ああ。和哉は別の事件を追ってるからな」

「そうか」

「それより俺に何か用って事は例の」

「ああ、今月に入って三件目の殺人だ。例の圧死事件」

「ドーパント、だな」

「ただ今回は今までと違って目撃者がいるらしい」

「目撃者？」

「佐々野理枝という少女だそうだ。家の近くに手帳が落ちていた」

「佐々野理枝？……あーっ!!」

* * * * *

疲れが来て、私の足がもつれてその場に転ぶ。

そのまま倒れていた、休みたいと思う体に鞭を打って、私は立ち上がって走り始める。

(どうして……。どうして……)

またいなくなってしまったポーちゃんの依頼を事務所に出して。多

来た。

そして、陰になっている所を覗き込み、其処に居た私と目が合う。

『見いつけたあ！』

「ひっ」

後ずさる私にドーパントが手を伸ばす。

逃げきれない。そう思ってしまった、体が動かなくなる。

そして。

『あん？』

吼えるようなバイクのエンジン音がどんどん近付いて来るのが聞こえた。

そのエンジン音は決して止まる気配も無く、まっすぐこちらに近づいてきて、そのまま一台のバイクがドーパントを轢いた。

悲鳴のような声を上げながらドーパントが飛び、ドリフトするように藍色のバイクが止まると、バイクに乗っていた人はバイクから降り、ヘルメットを外した。

「藍川、君？」

「すみません佐々野さん。ちょっと探しまわっちゃいました」

「……あ」

そう言えば最後に居ると言った場所から、大分離れてしまった気がする。

「其処にあるもう一つのヘルメットかぶって、少し待っていて下さい」

そう言つて藍川君は腰のホルスターからバイクと同じ色をした大型の拳銃らしい物を取ると、ドーパントの方を向いた。

「随分と景気よく壊してきたみたいだな、おい」

佐々野さんがいると言っていた場所に行ったが佐々野さんが見つからず、あちこち探していると何かに押しつぶされた様にぺしゃんこになっている車を見つけた。

その先に壊されている花壇を見つけ、その後も破壊跡がまるで足跡のように続いていて、それを追って此処まで来たら、ドンピシャだった。

「お前、無駄に街を壊しやがったな」

『だったらどおしたあ!!』

ドーパントが此方に向かって来る。エイドスピーダーと共に回収してきた『アレ』、エイドマグナムをドーパントに向け、引き金を引いて行く。

放たれた弾丸はドーパントに当たるも、威力が低いから然したる効果も無いらしく、ドーパントの足が止まる事は無かった。

「だろうなっ」

ドーパントの攻撃をギリギリで避け、佐々野さんから離れるように距離を取りつつ、一旦エイドマグナムを仕舞うと、スタッグフォンとギジメモリを取り出した。

『STAG』

「頼むな」

ギジメモリを入られたスタッグフォンが宙を舞って、ドーパントに対して体当たりをしていく。それを見ながら俺は再びエイドマグナムを手に取り、そして新たにメモリを取り出した。先程と違い、ギジメモリではなく炎のような線で描かれたBの文字がある、マグナムと同じ色のガイアメモリ。俺がガイアメモリに関わるきっかけにもなったメモリでもある。

『BLAZE』

ガイアウィスパーが響く。そのまま『火炎の記憶』を宿すブレイズメモリをエイドマグナムに挿入した。

『BLAZE』

「こいつならどうだ！」

俺の声に合わせるようにスタッグフォンがドーパントから離れた。そして放たれた俺の弾丸は、ドーパントに当たると、先程と違い爆発した。

『ぐお！』

今度はダメージがあったらしい。それならばと、俺は何度も引き金を引いて、ドーパントに次々に弾丸を当てていく。そして弾丸を放ち攻撃しながら、ドーパントに対して距離を詰め、飛び蹴りを入れて無理矢理距離を開け、バイクの近くまで戻ってくる。

（さて、どうするかな）

このまま戦うのもありだとは思う。
でもそれだと依頼人^{佐々野さん}を十中八九危険に晒す。

(なら此処は一旦引いた方がいいか)

『SPIDER』

ブレイズメモリのまま数発弾丸を放ち牽制をしてからメモリを抜いて、ギジメモリのスパイダーメモリを挿入した。そしてエイドマグナムを立ち上がりとしているドーパントに向ける。

「佐々野さん、バイクに乗って」

言うのと同時に、引き金を引いた。放たれた弾丸は、今までと違影响着弾前に炸裂。そして蜘蛛の巣のように広がると、そのままドーパントを絡め取った。

『うおっ!?!』

「スパイダーネット。ギジメモリを使って撃てる特殊弾の一つだ」

『くそっ、テメェ!!』

ドーパントがもかく様をしばらく観察してから、俺はエイドスパイダーに跨った。エンジンをかけて佐々野さんが俺に?まったのを確認して、発車させる。

『待ちやがれ!!』と後ろから怒声が聞こえたがそれは無視。

五分ほど走ってから、追って来ていない事を確認してスパイダーを止めると、ポケットからバットショットとギジメモリを取り出した。

BAT

バッテリーメモリをバッテリーに挿入すると、バッテリーがライブモードに変形した。

「あのドーパントを尾行してくれ。何かあったらすぐに逃げる事」

俺の言葉にバツトシヨツトが頷くようなしぐさをして、元来た道を戻り始めた。

バットショットを見送ってから、スピダーを再び発進。少し迷ってから、俺の自宅であるボロアパートに向かう事にした。

事務所の方だと人がいて落ち着かないかもしれないし、佐々野さんの住むマンションは場所がばれてるかもしれないしな。

*
 *
 *
 *
 *
 *

p
r
r。
p
r
r。
ピ
ッ。

「やあ、和哉。さっき翔太郎から連絡があつたんだけど、大丈夫かい？ 佐々野理枝がドーパントに狙われている可能性があるみたいなんだけど」

『ええ。フィリップさん。なんとか。佐々野さんも無事です。今は俺のアパートの方に。でも、何で佐々野さんが狙われているんですか？』

「どうやら佐々野理枝は最近風都を騒がせている連続殺人の現場を目撃してしまったようだね」

『最近って言うとは……あの人間が圧死させられてるあれですか？』

「ああ。現場に彼女の手帳が落ちていたらしい。翔太郎が連絡を取ろうとして、電話も繋がらず家にも戻っていないと困っていたよ」

『今の彼女にその話は酷ですよ。少し前までずっとドーパントに追いかけて、殺されようになっただんですから。其処でフィリップさん。検索をお願いしたいのですが』

「ドーパントについてかい？さっき翔太郎に頼まれて検索をしたけど、キーワードが足りない」

『キーワードについてなんですが。戦ってみて感じたんですけど、もしかしたらあのドーパントは何かしらの制約の元でしか、相手を圧死させられないと思うんです。そうでないなら、佐々野さんも俺もとっくに死んでますから。可能性としては……一度でもドーパントによって触れられる。つまり、接触』

「何故接触なんだい？」

『一つは田中さんを態々追いかけた事。遠距離で効果が使えたり、一定の範囲内という条件なら、田中さんは助かっていません。』

次に戦闘時に俺に近づいて来た事です。田中さんはわざと恐怖をおる為、という可能性もありえますけど俺の場合は武器を、それが銃であったにも拘らず、態々向こうから近付いてきました。俺がメモリを使い始めても、やはり力は使いませんでしたし。

最後にドーバントが田中さんを追いかけていたと思われる道筋の破壊跡。相手は破壊を楽しんでいる。車や花壇、道路等が壊されていたが、逆に言えばそれ以外が壊されていない。壊さなかったのではなく壊せなかったと考えれば、それは触れなかったから』

「……なるほど。一理ある。なら、キーワードに『接触』を加えて、もう一度検索を試みよう」

『お願いします。フリッツさん』

「結果が出たらこっちから電話するよ。それから、また戦うのであれば、マグナムのリミッターを外すといい」

『了解しました。ではフィリップさん。失礼します』

ピッ。
ツ、
ツ。

*
*
*
*
*
*

スタッグフォンを持ったまま、俺はエイドマグナムを手にとった。普段はマグナムに収納されているコードを引き延ばし、スタッグフォンに接続する。

「えーと……」

カチカチとフリップさんに事前に言われている暗証番号を入力する。

最後の数字を入力し、決定を選択すると、マグナムから『Unl
ck』と音声が出た。

マグナムをスタッグフォンから外し、その両方をホルダーとポ
ケット。それぞれに仕舞うと、俺は視線をベッドの方に向けた。

本来の主が寝ていないベッドの上には、布団の山が出来ていた。

「佐々野さん？」

山がビクリと震えた。もぞもぞと山が動き、佐々野さんが顔だけ
山から覗かせた。

「大丈夫か？」

「……うん」

ベッドの上に腰がけ、佐々野さんの頭を撫でる。

少しでも不安が和らげばいいと思っただけ、杞憂だっ
たようだ。佐々野さん、凄く心地良さそうにしてる。猫……とい
うより犬。

「佐々野さんは俺が守りますから、安心して下さい」

「でも……。相手はドーパントだよ？」

「問題無いです」

そう、問題無い。いつもの事だ。

「それよりも、ごめんなさい。佐々野さん。助けに行くのが遅
れてしまいました」

「え？あ、うん……。でも……助けて、くれたから」

はにかむようにそういう佐々野さん。やっぱり凄く美人、というか美少女。

「それでも、依頼人を危険に晒してしまったのは事実ですから」

「私の、運が悪かったただけだよ。気にしないで？」

「します。凄く気にします。なので、貴女に傷一つつけさせませんし、ポーちゃんを必ず見つけます」

「……うん。ありがとう。藍川君」

少し微笑んだ佐々野さんの顔が見えなくなり、慌てて目を反らした。蒸気した頬を何とかしようとしていると、スタックフォンが鳴った。取り出して開くと、画面にはフィリップさんの文字。手で相変わらず佐々野さんの頭を撫でたまま、電話に応じた。

「もしもし、フィリップさん？」

『ビンゴだ、和哉。君の言った通り、接触をキーワードに入れた結果、この事件の直前に被害者全員に触れた人物が一人だけいる』

「本当ですか!？」

『ああ。それに使用しているメモリも分かったよ。メモリの名前はグラビティー。重力のメモリだ』

「重力……。なるほど。それで圧死、ですか。使用者の名前は？」

『ああ。使用者の名前は藤岡淳士。詳しい事は後で君にメールで送ろう』

「ありがとうございます。フィリップさん」

礼を告げ、電話を切ろうとした時、電話の向こうから『和哉』と俺の名前を呼ぶ声が聞こえた。

「なんですか？」

『死なないでくれよ？君が死ねば』

「分かってます。迷惑をかけたくないですから。絶対に死にません」

『……全く君は。信じるよ、和哉』

「はい、フィリップさん」

電話を切る。それから少しして、スタックフォンにメールが届いた。それを開きながらベッドから立ち上がり、手持ちのガジェットとマグナムを確認した後、それぞれをいつもの場所に仕舞った。

準備は万全。体も絶好調で、後必要なのは覚悟だけ。その覚悟は犯人の元へ向かいながらする事にしている。

「さて、じゃあ、佐々野さん。ちょっと出かけてきますね。帰りは送りますので、家で待っていて下さい」

「ひと悶着あったみたいだね。その時に接触というキーワードを思いついたらしい。まったく。君の勘もそうだが、彼の戦闘中の洞察力も驚くべきところがあるよ」

「そんな事言ってる場合か！さっさと「翔太郎」って、なんだよフリリップ！」

「今回の事件には既に彼の依頼人が関わっているんだ。なら、君が首を突っ込むのは彼との約束を違える事になる。数は少ないとはいえ、彼への依頼の時は彼が助力を求めない限りは手を出さない。それが君と和哉との間で取り決められた、約束の筈だ」

「それは……そうだが……」

「それに今回の依頼人は彼がプライベートでも親しくしている佐々野理枝だからね。今更止まれと言っても止まらない。それに翔太郎。君も知っているだろう？和哉には経験も実績もあるんだ。君も少しは助手離れをしたらどうだい？」

「……フリリップ」

「なんだい？」

「一応検索結果を覚えておいてくれ。あいつが電話してきたらすぐに行ける様に」

「翔太郎……。本当に君は少し助手離れをした方がいい。亜希子ちゃんと違って自分を慕う有能な助手だからとはいえ、いくらなんでも過保護だよ」

風都の一角。何の変哲も無い、ビル街の中にすっぽりと出来た広場の様な場所にスピーダーを止め、俺はぼんやりと空を眺めていた。時折吹く風を楽しんでいると、足音が聞こえ始めた。スピーダーから降りてそちらを見る。其処に居たのは、ドーパントを尾行させたバッドショットに写っていた男と同じ人物だった。

男が俺に気が付き、殺気の宿った鋭い目を向けてくる。

「テメエ……！」

「藤岡淳士だな。お前の持つてるガイアメモリ。こっちに渡して自首をしろ。そうすれば許してやる」

「ハッ！誰がするかよ！」

GRAVITY

ポケットから取り出したグラビティーメモリを取り出した藤岡が、そのメモリを起動させ、自身の首に突き刺した。メモリが飲み込まれ、藤岡の体がグラビティーパントに変わる。

『テメエは黽り殺しにしてやる』

「数時間前に俺に圧倒されっ放しだった事をもう忘れたのか？」

BLAZE

フィリップさんの作った耐刃、耐熱等の効果があるグローブをつけて、俺もブレイズメモリを取り出す。それをマグナムへと挿入。

BLAZE

さて、翔太郎さんとフィリップさんなら「お前の罪を数えろ!」。
照井さんなら「振り切るぜ!」ととてもかっこいい決め台詞のよう
な物を言うのだけれど。

この台詞は覚悟を決める為の台詞だ。

「罪と共に燃え散れ」

相手を撃ち、燃やす覚悟を決める為の。

『黙れクソガキ!!』

そう叫んで、此方に向かって来るグラビティードーパントにマグナ
ムを向けた。そして引き金を引く。

放たれた弾丸は数時間前同様、真っすぐグラビティードーパントに
向かった弾丸は、着弾と同時に数時間前とは比べ物にならない威力
の爆発をした。

よろめくグラビティードーパントに続けざまに弾丸を放ち、それら
の弾丸は一つも外れる事無くグラビティードーパントに当たり、爆
発する。

そして十発ほど弾丸が当たった所で、グラビティードーパントが爆
発の衝撃で吹き飛んだ。

『ガッ!?!』

「つう……」

吹き飛んだグラビティードーパントを目で追いながら、マグナムの
反動で痺れた手首を解すように動かす。リミッターを外した事もあ
り、威力は上がった。しかしその分、マグナム自体の反動も上がっ

ている。

まあ、それでもこの程度で弾丸を外すようなやわな鍛え方はしていないが。

少しして、よろよろとグラビティードーパントが立ち上がった。あの程度でダメージが大きいのか、荒い息を吐いている。

『テメエ……。まさか、仮面ライダーか？』

「違うな。俺は仮面ライダーじゃない」

ドーパントとの戦闘の際、よく言われるその言葉を、俺は即座に否定した。

「俺のままで戦う。それが俺のプライドだ」

『だったら、テメエは一体何者だ!!』

「俺は……何者でもないさ。ただの探偵助手だ」

マグナムの銃身を引き延ばすように動かすと、メモリが銃身の中に取り込まれるようにして動いた。

『BLAZE! MAXIMUM DRIVE!』

「ブレイズブラスター!」

グラビティードーパントに向けて放たれた弾丸は、今までと違いサッカーボール大のマグナムと同じ藍色の火弾となる。

その弾丸が今までの弾丸と同じ位の速度でグラビティードーパントへと迫り、爆発した。

その爆発が収まり、地面の一部が未だに藍色の炎で燃えている中、藤岡が倒れていた。その近くには、ブレイク出来ていないグラビティーマモリが落ちている。

「ブレイク出来ない……。まあ、威力が足りないからしょうがないか」

名前こそマキシマムドライブだが、蓋を開ければWやアクセルのマキシマムよりも大分威力が抑えられている。それこそ、メモリをブレイクしきれず、排出させるのがやっと、と言ったところだ。

それだけの威力なのに、マグナムを使っていた右腕が上がらない位に痛むのだから、本来のマキシマムなんて使った日には、体が壊れるかもしれない。

それが分かっているから、俺は諦め混じりに溜息をつき、グラビティイーメモリを左手で拾うとポケットに仕舞った。

それからの事を少しだけ話そう。

あの後照井さんに連絡して藤岡の事を告げて来て貰い、藤岡を引き渡して何とか動かせる程度に右腕が回復した事もある、バイクで帰る。

一旦自宅によって、佐々野さんと合流。自宅まで送った後、ポーちゃんについて色々話して、その日は解散。

そして事務所に戻り……。翔太郎さんに怒られた。約束に順守したいも関わらず、だ。

フィリップさんも苦笑していたが、止める気配は無い。

……。まあ。あれだ。

心配されて嬉しく無い訳が無い訳で。俺は大人しく翔太郎さんの説教を聞いていた。

そして今日も、一日が終わる……。

Aの予告／with P

「やれやれ。翔太郎の助手馬鹿にも困った物だね、和哉」

「あはは……。でも、心配して貰える事は凄く嬉しいですよ。ずっと一人でいたから」

「そうなのかい？」

「ええ。まあ、心配掛けないように、これから精進して行くつもりです」

「君がどれだけ強くなっても、翔太郎の助手馬鹿は直りそうにも無いけどね。

それよりも和哉。君はEXEという組織を覚えているかい？」

「EXEですか？ 確か、自称ミュージアムを継ぐ者とか言ってますけど、蓋を開ければ、ガイアメモリでひと稼ぎしようとしていた不良集団ですよ。既存の品を集めて売っているだけの癖に、よく継ぐ者とか言えるなこいつ等って思った事を覚えてます」

「相変わらず、和哉は身内以外には大分口が悪いね。」

実はそのEXEのようにガイアメモリを流通させて、金を稼いでいる組織があるようだ。最近、タキシードを着たガイアメモリを販売している男が何人も目撃されている」

「それはまた……。どうにかしないとですね」

「警察は人海戦術で売人達を追いかけているらしい。翔太郎も駆り出されるだろうし、君も駆り出されるだろう。気を付けたまえ」

「はい。フィリップさん」

其処にあるI／すれ違う想い

財団X。ミュージアムのガイアメモリ製造に資金援助を行ったり、自らもT2ガイアメモリと呼ばれる、次世代型のガイアメモリを製造した組織。

ミュージアム。園崎流兵衛率いる組織であり、そもその根源。ガイアメモリを製造、売買していた。俺は詳しい事は分からないけど、ミュージアム……、園崎家にも地球の未来を変えろという大義名分があり、それを知ってしまうと、やり方を間違えただけでもっと別の道があったのではと思ってしまうのは、俺が翔太郎さんのハーフボイルドがうつったからだろうか。

EXE。ミュージアムを継ぐ者を自称して、ガイアメモリの売買を行っていた不良集団。エナジードーパントが率いていた組織だったが、あっけなく壊滅。

その後フィリップさんが戻って来た事もあって、つい先日まで存在を忘れていた程に、影が薄い組織（組織と言うほど立派でもないが）だった。

そして……。

EXEのようにガイアメモリの売買を行っているらしい組織が、再び風都に現れたのは一ヶ月程前。

風都の連続圧死事件も同時期から起こり始めた事を考えると、もしかしたら藤岡の所持していたグラビティーメモリも、この組織が所

持、そして販売したのかもしれないと推測出来る。

この組織。財団X、ミュージアム、EXEに続く、新たなガイアメ
モリに関わる組織の名は……。

「インフィニティ？」

今、鳴海探偵事務所には何時もいる、翔太郎さんにフィリップさんそして俺に加えて、久しぶりに事務所に来た所長に照井さんの五人がいる。

何やら難しい顔をした照井さんは所長を連れて事務所に来て、適当に挨拶を済ませるやいなや、「インフィニティを知っているか」と、翔太郎さん、フィリップさん、俺の三人に尋ねた。

「俺も知らないな。フィリップは？」

「英語のスペルとしてならともかく、僕も知らないよ。そのインフ
イニティに何か意味があるのかい？」

フィリップさんの言葉に、照井さんが「ああ」と頷く。

「以前いたEXEのようにガイアメモリを売買している組織だ」

「……もしかしてガイアメモリを販売してるって言う、タキシードを着た男達の話ですか？」

「なんだ？既に調べていたのか？」

「いえ。ウォッチャマンさんに依頼料を払いに行った時に『ちゃんと払ってくれる和ちゃんにいいこと教えてあげる』って言われて、その話を聞きました」

その前に一時間くらい、翔太郎さんが払ってくれないと地味に愚痴を聞かされたんだけど。まあ、それは黙っておく事にしよう。

「何時の間に……」

「それで照井さん。そのインフィニティ……Infinityですか。その組織がどうしたんですか？」

「ああ。実は今、藍川が言ったガイアメモリを販売している男達の話にも関係しているんだが、今、超常犯罪捜査課でその組織を追っているんだが、人手が足りなくてな」

「そりゃ、照井さん含めて三人しかいませんからね」

おまけに刃さんこと刃野刑事とマッキーこと真倉刑事だし。あの二人は非常に心もとない。

「手を貸して貰えないだろうか？」

「俺は構わないぜ」

「じゃあ俺も「お前は駄目だ」。一応聞きますが何故でしょうか？」

「危険だからに決まってるだろうが」

「……お言葉ですが、まだ認めて貰えないのでしょうか」

「認める、認めないの問題じゃねえだろ。それ以前の問題だ」

翔太郎さんの言葉に、翔太郎さんと俺を除く事務所の全員がドン引きするような顔をした。

翔太郎さんは俺以外の顔に気づくと「なんだよ」とどこかふてくされたように声をかけた。そして、ドン引きしていた全員が溜息をつく。

「左……」

「翔太郎……。本当に助手離れするべきだよ」

「翔太郎君。いくらなんでも酷いんじゃない？」

「あん？俺は——」

翔太郎さんの言葉を最後まで聞かず、俺は思い切りテーブルを叩いた。

視線が集まる中、俺は下を向いたまま、声を出した。

「……心配される事が嫌いな訳じゃありません。寧ろ嬉しい位です。この事務所に入所して、皆さんと出会うまでそんな人はいませんでしたから。だけど」

一息つく。そして顔を上げ、翔太郎さんを睨みつけた。

「翔太郎さんは――」

俺の事が邪魔ですか。そう言いそうになり、慌ててその言葉を飲み込んだ。

「……Infinityは俺が個人的に追います。絶対に捕まえるなり、壊滅させるなりして見せますよ」

それだけ言うと、俺はエーブルに置いていたエイドマグナムの仕舞ってあるホルスターと、エイドスピダーの鍵をその手に持って事務所から駆けだした。

*
*
*
*
*
*

「お、おい！和哉！」

「ストップ、翔太郎。今の君に、彼を追いかける資格は無い」

「なっ、どういう意味だ、フィリップ！」

「言葉の通りの意味だ。何故彼があんなに辛そうな顔をしていたのか。その理由が分からない君に、彼に何か追いかける資格は無いよ」

「そうだよ。翔太郎君。何で和哉君があんなに辛そうだったのか、よく考えなさい！」

「そんな事言われたってよお……」

「はあ、分からないなら分からないなりに、君のすべき事をしたまえ、翔太郎。和哉の事は僕とアキちゃんに追いかけるから。それじゃあ行こう、アキちゃん」

「うん、フィリップ君」

「照井竜。すまないが、僕は力を貸せそうにない」

「いや。早く行ってやれ」

「ああ」

「竜君。翔太郎君の事、和哉君の分までガンガンこき使って構わないからね！」

「そうさせてもらうよ、所長」

* * * * *

「……はあ」

海の方をぼんやりと眺めつつ、俺は溜息をついた。

「何やってんだ、俺」

助手の立場で上司に対して、挑発するような事を言って飛び出して来て。最悪じゃないか。

（あの人はハーフボイルドなんだから、ああ言われたって、しょうがないだろうが……）

甘いというか優しいから、俺を心配しての言葉、だと言う事は良く分かっている。分かっている……。

「どうするかなあ」

再び溜息をついた。

翔太郎さんにああ言ったものの、手がかりがある訳でもない。街中を走っていれば、何かしらの手がかりは手に入るかもしれないが、ウォッチャマンさんですら詳しい情報を持っていなかったほどだ。闇雲に走り回って、何か手掛かりを得られるとも思えない。

「それっぽい所をしらみつぶしに走って探すか。ついでに」

『STAG』

『BAT』

『SPIDER』

ギジメモリを差しこみ、スタッグフォン、バットショット、スパイダーショットと手持ちのガジェットを全てライブモードにした。周りにいるガジェット達を見ながら、彼らに告げる。

「ガイアメモリを販売している人間。複数名いる筈だ。そいつらの誰か一人でも探してくれ。分かっている事はタキシードって事だけ。もしかしたらガイアメモリを運ぶのにスーツケースみたいなケースを持っている可能性もある。そういう奴を中心に探してくれ」

俺の言葉に頷く様に総てのガジェットが動く、そのまま方々へと散って行った。それらのガジェットを見送り、いざ俺も走りだそうとすると、「ちょっと待って」と良く知った声で呼び止められた。

「和哉君はいつもそう。何かあると、必ず此処に来るね」

「お気に入りの場所ですから」

被ろうとしていたメットを起き、声の主の方を見る。予想通りの人物が其処にはいた。

「所長。どうしたんですか？」

「どうしたじゃないよ。和哉君、飛び出して行っちゃうんだもん。心配したよ」

「……すいません」

「でもどうしたの？何からしく無かったよ？」

確かに。普段の俺だったらあそこは愛想笑いで誤魔化して、こそこそと後ろからついて行って、翔太郎さんが追い返せない状況にする。

「そうですね……。でも」

「でも？」

翔太郎さんが俺の事を邪魔だと思っているかもしれないと思ったら、居辛くなっただけです。

「……何でも無いです」

そんな事言える訳も無かった。思わず黙り込んでしまうと、何時の間にか近づいて来た所長が俺の頭に手を置く。吃驚して顔を上げると、凄く優しい顔をした所長がいて、その手を払うに払えなくなっ

「和哉君」

「なんですか、所長」

「もう和哉君があ事務所にいるようになって二年近く経つよね」

「そうですね。もうすぐ二年です」

長いような短いような。そんな二年だった。

「もっと長い間いる気がするけど。まだ二年しか経っていないんだね」

所長のその言葉は、まるで俺がいるのが至極当然と言っているようで。それが凄く嬉しかった。

だからこそ。

「所長」

「何？和哉君」

「えっと……」

俺は翔太郎さんにどう思われてるんでしょうか。

そう尋ねようとした。そう尋ねようとして、見つけた。良くいるスーツ姿の男に場違いなタキシードを着た男。そして、タキシードの男が開いた状態で持っているケースの中には、色とりどりのガイアメモリが所狭しと並べられている。

「あの男！」

距離とこの辺りの地域を思い出し、俺はエイドスピーダーから降りると、その男達に向かって走り出した。

「ちよっ、和哉!？」

慌てて所長が追いかけてくる気配がしたが、その気配を無視して、男二人に向かって走る。

スーツ姿の男がタキシードの男からメモリを受け取り、スーツの男が恐らく金が入っているであろう、封筒をタキシードの男に渡す。

それで取引が終わったからだろう。タキシードの男が封筒をケースの中に仕舞い、スーツの男がガイアメモリのボタンを押した。

『KEY』

「ストオオオオオオオッ！！！！！！！！」

「は？ゲブラッ！？」

嬉々としてキーメモリを首筋の生体コネクタに挿そうとしたスーツ姿の男に、思いきり飛び蹴りをかまして蹴り飛ばした。

男の手から離れ宙を舞ったキーメモリをキャッチして自身のポケットに入れつつ、腰のエイドマグナムを手にとってタキシードの男に向けた。男が身構える中、所長が追い付き、所長は戸惑ったように俺と、俺が蹴り飛ばした男を見つめている。

「ち、ちよつと、和哉君！？いくらなんでもあれはやり過ぎじゃない！？」

「あの男、ちよつと前に事務所に依頼があった、下着ドロですよ。翔太郎さんがウォッチャマンさんから貰ってきた写真の男と同一人物でしたし、双子とかでもない限り本人です」

「そういうのはちゃんと確認してから……」

「仕事関係なら人の顔は間違えませんよ。それよりも所長。逃げた方がいいかもしれません」

「へ？一体何が」

『GATE』

「へ？」

思わず舌打ちをして、生体コネクタに挿そうとしていたゲートメモリを狙ってマグナムを撃つが、それよりも早くメモリがタキシードの男の左手の甲にある生体コネクタに吸い込まれていく。

男を庇うように門が現れその門が弾丸を防ぎ、次に門が開いた時にはタキシードの男の姿がドアノブや扉。門のような物が大量に付いたゲートドーパントに姿を変えていた。

「嘘……。私、聞いてない」

「所長。逃げて下さい。……いえ。やっぱり俺が移動しますから、所長は此処に残ってその男を警察に突き出して、ついでに他の人達と合流して下さい」

「え？ ちょっと、和哉君!？」

所長にそう告げ、俺はゲートドーパントに立ち向かう。

メモリは使わず、マグナムを撃ちながら距離を詰め、飛び蹴り。よろめいた所にさらに弾丸を撃って行きながら、藍色のガイアメモリを取りだした。

『BLAZE』

ブレイズメモリをエイドマグナムに挿入。そうして放たれた弾丸は、着弾と同時に炸裂した。

何発を撃ちながらころあいを見て、よほど大事なのか戦いながらも手放さないガイアメモリの入ったケースを持つ腕に向かって、マグ

『しょ、翔太郎君!?!』

「亜樹子? お前、和哉の事を追いかけていったんじゃなかったのか?」

『そうだったんだけど! えっと、和哉君を見つけたら、和哉君が見つけて走りだして、蹴り飛ばして』

「落ち着け、亜樹子! 和哉がどうした!」

『か、和哉君が竜君の探してた組織の人を見つけたみたいで、その人の事がドーパントになって、その人連れて和哉君がどこかに行っちゃって!』

「はあ!?!」

『と、とにかく急いで来て! 和哉君、凄く悩んでたから、きつといつも以上に無茶するよ!?!』

「何で止めねえんだ亜樹子!」

『そもそも翔太郎君のせいでしょう! 翔太郎君があんな事言うから!』

「だから俺は!」

「左。所長に言い訳する前に、藍川の所に急ぐぞ」

「っ、ああ。亜樹子! 其処動くなよ!」

『う、うん！』

ピッ。
ツ、
ツ。

「ったく。和哉は」

「お前が言うな。そもそも、お前がきちんと伝えていれば、藍川だ
って出て行かなかっただろう」

「あいつが俺の言う前に飛び出して行ったんだろうが！」

「それ以前からのお前の言動のせいだろう」

*
 *
 *
 *
 *
 *

メモリを使わず、マグナムを通常弾のまま牽制と挑発するように、ゲートドーパントに向かって弾丸を放ちながら走って。

人気のない場所まで来てから、俺はゲートドーパントの方に向き直った。ゲートドーパントも同じように足を止める。

『諦めたか。なら、早くそれを渡せ。そうすれば命だけは助けてやろう』

「人気のない場所まで誘い出されたって考えるべきだろう。とりあえず此処なら」

BLAZE

「周りを気にしないで戦える！」

ブレイズメモリを挿入したマグナムをゲートドーパントに向けて放つ。

『ぐっ、うおっ』

弾丸が爆ぜ、ゲートドーパントにダメージを与える。反動で右腕に痛みが走るが、その痛みをこらえつつ、左手でポケットに手を入れ、ある事に気が付いた。

Infinityの売人の搜索にガジェット全てを動員していて、ギジメモリが一つも手元に無い。

（普段なら、スタックかスパイダーのどっちかは手元に残しておくのに）

完全に失策。思った以上に冷静じゃなかった。

考えていた作戦を改めようと、それを遮る様にゲートドーパントが叫んだ。

『舐めるなよ、小僧が！』

「っ!？」

ゲートドーパントの言葉の直後、ゲートドーパントの近くに扉が現れ、その中にゲートドーパントの姿が消えた。慌てて扉の近くまで行くが、扉は既に消え影も形も無い。

(逃げた?……いや、ありえない)

俺の左手にはゲートドローパントの男が持っていた、ガイアメモリの入ったケースが握られている。このケースを取り戻すまで、逃げるとも考えづらい。

警戒している中、ドアが開く様な音が後ろから聞こえ、振り向きざまに脇腹に強烈な衝撃を喰らい、それと同時に横に跳んだ。地面に体が付いた直後に受け身を取り、その勢いのまま立ち上がり、マグナムを向けると其処にはゲートドローパントの姿があった。

「任意の場所に扉を作っての空間移動ってところか……? 逃げるには便利な能力だな」

『人間を越えたこの俺が、何故ただの人間から逃げる必要がある?』

「なら聞くが、そのただの人間相手に空間移動の能力を使わざるを得なくなったのは、どこのだいっだ?」

『減らず口を!』

「事実だ」

此方に向かってきたゲートドローパントに向かって引き金を引く。その反動で、今度は腕だけでなく先程蹴られた脇腹の辺りまで痛みが走った。齒を食いしばって痛みに耐えながら、引き金を引いて行く。痛みは辛かったが、かといって銃口がぶれる事は一度も無く、狙い通りにゲートドローパントに当たっては炸裂し、ゲートドローパントにダメージを与えて行く。

距離があるからか、抵抗らしい抵抗も出来ぬまま、ゲートドーパン
トは弾丸を喰らい続け、その場で膝を折った。

「ラスト。決めるぜ」

『BLAZE! MAXIMUM DRIVE!』

「ブレイズブラスター」

今までで一番大きな衝撃と共に放たれた火弾は真っすぐゲートーパ
ンとに向かい、そのまま爆発した。

其処にあるI／現れたライダー（前書き）

オリジナルライダーが出てきます。

最もあの扉の力を使われれば分からないが、爆発した所を見れば、着弾した事は間違いない。

（ただ今のマグナムはリミッターがかかったまま……。火力的にも正直怪しいところではあるが……）

それでも無傷とまではいかない筈。なら多少無理しても、もう一撃。マキシマムを入れる。

翔太郎さんに知られれば怒られそうな作戦を立てながら、痛みを少しでも軽くしようと数度深呼吸をする。そして、徐々に爆煙が晴れて来た。

その煙の向こう側。少し前までゲートドローパントが立っていたその位置に、別の影が見え始める。

「……なっ!？」

目を疑った。未だ全身が見えている訳ではないが、体の一部。それも腹部の辺りから徐々に見えて来て、其処には見覚えのある物が確かに存在していた。

「ロスト……ドライバー……だど？」

かつてWよりもずっと前から戦っていた鳴海壮吉さんや風都を恐怖のどん底に陥れた大道克己。そして一時期大切な相棒フイリツプさんを失い、一人で戦っていた頃の翔太郎さんを仮面ライダーへと変身させていたツール。

しかしその内の二つは既に存在せず、最後の一つは翔太郎さんが今

でも大事に保管してあるはずだ。

「誰だ、お前！」

マグナムを向けながら叫ぶ。しかし直ぐに答えはなく、やがて爆炎が霧散し、その姿が現れた。

Yを二つ、上下逆さにつけて見ようによってはIとも見えなく無い角が顔の中央を真っ直ぐ伸び、紫の複眼と白の体。そして胸の所には黒で無限を表す∞が刻まれており、両肩には同じく黒のサポーター。両の腕には顔の角と同じようなマークが刻まれている。

「……インフィニティ？」

「そう。我が名は仮面ライダーインフィニティ。王の名だ。しかと心に刻め」

「……お前、そのゲートドローパントを庇ったって事はInfinityの構成員って事か？」

「違う。王たる我を一家臣と同列に扱うな」

「家臣？なら、お前が組織のボスって事か？」

「いかにも」

「なるほど分かった。なら」

脇腹を押えていた手を外し、マグナムに添える。細く息を吐き、それから敵を睨みつけた。

恐らく先ほどまでとは違う戦いになる事はすぐに分かった。だからこそ。この言葉を叫ぶ。

「罪と共に燃え散れ！！」

言葉とほぼ同時に、開幕一撃目の弾丸を放った。

* * * * *

ドーン……

「!?」

「今の爆発音は……」

「和哉だ！ ったく、あいつは！」

ダッタッタ

「おい左！……普通あれだけで藍川と分かるものか？」

* * * * *

振られた刃を紙一重で避けつつ、ステップを踏んで距離を置きつつ、火弾を放つ。その火弾は見事に両断され、ダメージを与えることなく爆発した。

（さて、どうするかな）

此方が撃つ火弾も通常弾もあの刃に阻まれて、ただの一発たりともあの似非ライダーには届いていない。しかしあの似非ライダーの剣戟もまた、同じく俺には届いていない。

表面的な状況だけを見るならば五分。本来銃器という武器に存在する弾切れという弱点がエイドマグナムには当てはまらない以上、このまま平行線を辿り決着がつかなくてもおかしくない。

……しかしそれは、俺と相手のスペックの差と手札の数によっていくらかでも変わる。

（やっぱり、この場は退くべきだ。ドーパントを相手にするのと、似非とは言え仮面ライダーを相手にするのは勝手が違う。それは以前のエターナル戦で思い知らされた）

まあ、エターナルは似非ではなく、本物の仮面ライダーだったのだ
が。

（今の俺の手札は、ギジメモリが一つもない以上、使い切りのグラビティーメモリと戦闘には向かなそうなキーメモリのみ。……それなら）

地面を蹴って、敢えて此方から近づいた。

「王である我に正面から挑むか、面白い」

似非ライダーはその場から動かず、迎え撃つつもりらしく、左手のみで柄を持ち、居合いのような構えをとった。

考えが読めず、数瞬悩んで足に力を込めて突撃の速度を上げる。

「何かされる前に撃つ！」

突撃しながらマグナムを向け発砲。多少の無理は承知したうえでク
イックドロウ。ほぼ同時に限界数の五発の火弾を放った。

（その体勢からなら手の内を曝す以外で身を守る術は無いだろ！？）

迫り来る火弾。それに対して似非ライダーは冷静にロストドライバ
ーからガイアメモリを引きぬくと、柄頭についていたスロットにそ
のガイアメモリを入れた。

『INFINITY！MAXIMUMDRIVE！』

「っ！」

慌てて制止。銃身を伸ばしながら、マグナムを向ける。

『BLAZE！MAXIMUMDRIVE！』

「ブレイズブラスター！！」

似非ライダーが動くよりも早く引き金を引く。その直後、サッカー
ボール大の火弾が、真っ直ぐ似非ライダーに向かって飛んで行く。

「無刃限波」
むじん げんは

似非ライダーはそれらの火弾を意に介さず、無造作に刀を居合い
の要領で振った。そしてその刃の軌跡を辿る様に光の刃が生まれ、
それがこちらに向かいながら二つ。四つと倍々に増えて行く。

光の刃に火弾が次々と打ち消され、ブレイズブラスターも数本の光
の刃によって相殺された。

「生き残って見せろ、若き銃士」

「くそっ」

更に下がりながらブレイズメモリを引き抜き、その代りにグラビティメモリを差し込み、銃身を伸ばす。

『GRAVITY! MAXIMUM DRIVE!』

「マキシマムバレット! ver GRAVITY!」

引き金を引くが、弾丸が放たれる事はない。しかし数メートルほど先で自分に向かって飛来していた光の刃が、まるで上から潰されるようにして地面に叩き付けられて消滅した。その後も、其処を通ろうとする光の刃が、片っぱしから上から潰されて消滅する。

「防ぐか。だが、いつまで持つ?」

「さあな」

弾丸が発射せず、効果だけ出現するタイプの特殊弾は、マキシマムを含め効果時間がまちまちだ。直ぐ消える物もあれば、一時間、二時間と長続きする物もある。

本当なら、戦闘で使う前に試し撃ちをしたいところだが、ブレイズのマキシマムを当てて強制排出させたガイアメモリは、エイドマグナムなりガジェットなりで使用する、一度の使用でブレイクされてしまうから、試し撃ちなんて事は出来ない。

だから結果としてぶつつけ本番になってしまう。弾丸のタイプ、効果時間。全て知らない物を、戦闘で使う羽目になる。

「頼むから安定してくれよ」

そんな事を呟いた直後、マキシマムバレットの効果が切れた。

「だあああ！言ってるそばから切れやがった！」

幾らか減ったとは言え、この狭い路地裏ではまだまだ多い。地理的に回避は不可能。相殺もブレイズブラスターの速射が出来ない以上は不可能。

「諦めるかよっ！」

だったらせめて、火弾を速射して少しでも刃を減らす。

ブレイズメモリを取り出し、起動。そのままエイドマグナムに入れようとした直後、何かに引っ張られるように空中に放り投げられた。

天地が逆さまになるなか、視線の先に居たのは、両者ともによく知っている怪人。

片方は赤い装甲、青い眼がトレードマークのライダー。

そして右側が金。左側が黒の二色のライダー。俺を放り投げた張本人。

「翔太郎さん！照井さん！」

仮面ライダーWルナジョーカー。仮面ライダーアクセル。この街の仮面ライダーが其処にいた。

*
*
*
*
*
*

「見つけたぜ！和哉だ！」

若干視界が悪いのは、目が潤んでいるからだろう。鼻の頭が痛い。

「和哉！」

翔太郎さんの声が聞こえた。それと同時にガイアメモリが宙に投げられ、慌てて立ち上がるとそのメモリを起動して、エイドマグナムに入れる。

『CYCLONE!』

（少し辛いがやむなしか！）

弾速が極端に上がるのが特徴的な、サイクロンメモリの特殊弾。試しの一発で光の刃一つと相殺したのを見て、短く息を吐く。

「ふっ」

クイックドロウ。限界値の五発の後、ほぼ間髪入れずに、再び五発。だいぶ無茶をしている事とサイクロンの弾速もあって、光の刃はかなりの速度で目に見えて減っていく。それでもまだそれなりに残ってはいるが。

「十分だ和哉！」

「っと」

『METAL! MAXIMUM DRIVE!』

翔太郎さんの声に合わせるように後ろに下がった直後、ルナメタル

へとハーフチェンジしたダブルが、メタルシャフトのマキシマムスロットにメタルメモリを入れた。

「『メタルイリジョン！』」

鞭のようになったメタルシャフトを回し、黄色の円状のエネルギーを生成し、それらが飛んでいき残りの光の刃を相殺した。

「ハア……ハア……」

「大丈夫か和哉」

「……何とか。それよりも」

路地の奥に目を向ける。其処には先程と寸分違わぬ位置に似非ライダーが立っていた。そしてその手には先程は持っていなかった持ち手の無いスーツケースが握られている。

「なっ!？」

手を見下ろすと、持ち手のみが俺の手の中にあった。何か鋭利な刃物で斬られたらしいが、その自覚は全くない。

（何時斬った!？光の刃で俺に届いたのは一撃も無い。近づかれもしなかった!？だったらどうやって）

「さて、目的の物は取り戻した。この街の仮面ライダーの実力は気になるが、家臣もいる。此処は退こう。さらばだ仮面ライダー。そして銃士よ。縁があればまた会おう」

「待ちやがれ!」

逃がすまいと放った弾丸は、やはり似非ライダーに当たることなく、

全て斬られた。そして似非ライダーとゲートドーパントは、ゲートドーパントの作った扉に入りその姿を消して、扉も消えた。

暫く警戒したが追撃が来る様子もなく、本当に撤退したらしい。思わず気が抜けて、それと同時に今まで意識しないようにしていたわき腹の痛みが急激に襲ってきて、庇うように手で押さえてしまう。

それを見たWとアクセルが、それぞれ変身を解いて、崩れ落ちそうになった俺の体を支えてきた。

「藍川。大丈夫か？」

「ええ。何とか」

「おい、和哉！普茶ばかりしやがって！」

「……」

ブチッ。

「あ・ん・た・が言うなあああああ！！！！！！！！！！」

「「うおっ!?!」」

驚いたらしく、翔太郎さんと照井さんが俺から離れた。

それを意に介さず、ビシッと翔太郎さんを指差した。

「無茶するななんて貴方にだけは言われたくないですよ！そもそも貴方が頑なに俺を認めようとしなから俺はっ！何なんですか！貴方は俺が邪魔ですか！目障りですか！俺は、あの事務所にいない方がいいですか……」

大声で一気まくし立て、そして後悔の波が押し寄せてきた。どうにももらしくない。普段なら平気な筈なのに。

ほぼ一息でまくしたてた事もあり、少しだけ息を整えながら、翔太郎さんの言葉を待つ。

そして。ゴンツと鈍い音が俺の頭部から響いた。

「うおお……」

「そんな風に思われてたのか」

頭部を襲う鈍い痛みに耐えていると、翔太郎さんの声が聞こえて来た。

「和哉。俺はまだおやつさんのような立派な探偵になれてねえ。お前の気持ちにも気が付かなかった位だ」

「ハーフボイルドですもんね。其処を含めて、俺は貴方の事を尊敬しています」

「……。だから、俺はお前に甘えちゃってたのかもしれない」

「甘える？」

「フィリップみたいな相棒とも違う。照井みたいな戦友ともまた違う。なんかこう……」

上手く言葉が出て来ないのか、悩み始める翔太郎さん。とはいえ言って貰えなければ俺としても翔太郎さんの言葉が分からず、仕方なく言葉を待つ。

「……そう！探偵と助手みたいな関係だ」

「まんまだ!？」

思わず敬語じゃなくてタメ口のツツコミが出ちゃったよ。

「あ、いや。そうじゃなくて。なんか、こう……」

「……はあ、翔太郎さん！」

「はい！」

「俺の質問にイエスカノーで答えてください！」
「分かった！」

さて。

「俺のこと、少しは認めていてくれますか！」

「イエス！」

「じゃあ、俺の事目障りですか！」

「ノー！」

「嫌いですか！」

「それもノーだ！」

「なら」

それなら。

「俺はあの事務所に居てもいいですか？」

「イエス」

即答してくれた。それが嬉しくて、思わず流れそうになった涙を、何とか耐える。

「あの事務所には、和哉が必要だ。だから和哉には余り危険な事をしないで貰いてえ。俺達のサポートならともかく、な」

「……そうですか」

自然と自分の中の怒りや辛さと言った物が解消されていく気がした。我ながら現金だとは思うが、うれし涙を耐えるので精いっぱいだった。

歯を食いしばり、下を向いて。溢れそうになる涙を暫し耐えてから、翔太郎さんの方を向いた。

「ありがとうございます。でも、俺はこれからも戦いますよ。一人でも」

「和哉！」

「俺はこの街が好きです。この街に居る人が好きです。だから俺はこの街を、人を守りたい。だから戦うんです。俺には戦う力があるから」

「和哉……」

「翔太郎さんと同じですよ」

「……」

「……」

「……そろそろいいか？」

ふと聞こえた第三者の声。そちらを見ると、赤い革ジャンを着た知り合いがいた。

「照井さん。居たんですか？」

「……俺に質問するな」

絞り出すようにそう言うと、照井さんは溜息をついた。

「左、藍川。色々話したい。そろそろ移動しないか？」

「ん？ ああ、そうだな」

「あ、俺はバイク拾ってから行きますんで、事務所に先に戻っていい下さい」

ぺこりと頭を下げ、俺はエイドスピーダーを置きっぱなしにしていた場所まで、走って戻った。

*
 *
 *
 *
 *
 *

「俺達も行くか、照井」

「ああ。……なあ、左」

「なんだ？」

「藍川はああ言っていたが、これからどうするつもりだ？」

「知ってるか、照井。和哉があやつて俺に感情をぶつけて来たのは、初めて会った時以来なんだ」

「ああ。そういえば、藍川と初めて会った時の事を以前所長から聞いた事があるが、そんな感じだったらしいな」

「事務所で働くようになってから、あいつは今みたいになった。感情を殺して、せっせと働いて。危ない事をする」

「まあ、そうだな。藍川はそんな感じだった」

「だから、あいつが働き始めてから初めてああやってぶつけて来た感情だ。だったら、俺はそれを尊重してやりたい」

「得意のハーフボイルドか」

「ぐっ」

*
*
*
*
*
*

「あああああ！！？？」

スピーカーを置いておいた場所に戻ると、其処にスピーカーが無かった。

代わりにあつたのはなぜか置き手紙。それを拾って、文面に目を通した。

『ここ駐車違反だよ！なので、先に事務所の方に行って行きます。』

『亞樹子』

「ハ
ハ
ハ
ハ
…」

体の痛みもそろそろ限界なのですが。所長、貴女は悪魔ですか。

重い溜息を一つつき、俺は事務所に向かって歩き始めた。

A
の
予
告
／
w
i
t
h
S

「翔太郎さん。今日はご迷惑おかけしました」

「ふっ、男は過去の事は気にしない。それが、ハードボイルドさ」

「そんなだから半人前ハーフボイルドなんですよ。過去を見て、それを糧に未来を見つめるべきでしょう」

「うぐっ」

「あ、今の言葉で思い出したんですけど、そう言えば昨日の夜辺りに、お隣に住む松江さんが事務所に相談したい事があるって言っていましたよ。」

佐々野さんと照井さん以外の依頼人は実に一月ぶりですね」

「ああ、そうだな。それで？依頼の内容は」

「実は一人息子が行方不明らしいです。一週間ほど」

「一週間!？」

「ええ。ああ、因みにそいつとは小学校の途中からと中学校が同じだったんですよ?」

Yとの再会／赤字の事務所に福は来ない

訳あって街の外にいた事もあり、俺が風都の学生になったのは小学校の途中からだったりする。

小学四年生の時にこの街に戻って来て、それ以来風都第一小学校、第一中学校と学生を続け、中学三年の時に翔太朗さん、というより仮面ライダーWと出会い、探偵事務所を手伝い始める。

そして高校に通う事は無く、そのまま探偵事務所で働き始めた。

そうして今に至る。

* * * * *

「本当ですか？本当にこれで」

「当然だよ。君は超人になれる」

「そう……ですか……」

「君は力を手に入れられる。望んでいる力をね」

「望む力……」

「そう。君が望む力がね」

「DOG！」

ガイアメモリ犯罪組織『Infinity』の構成員であるゲートドーパント。そして組織のトップであり自らを王と名乗る似非ライダーこと仮面ライダーインフィニティ。この二人との戦闘から一週間が経った。

俺の場合はそれに加えてもう一つ、頭を非常に悩ませている問題がある。

無駄と知りながらも、呟いて願ってから、目的のページを開く。その文字は、数時間前に見た時と変わらず、赤のままだった。

それどころかマイナスだ。事務所の給金とその他のバイトで貯蓄はぼちぼちあるから、それを切り崩して何とか誤魔化せてはいるけど、それでもそろそろ限界が見えてきた。

「大体、あの人達は事務所の財政が分かっているのか」

フィリップさんは興味を持ってしまうと、検索後に色々買ってくるし、翔太郎さんは片方しか読まないのにハードボイルドな探偵小説わざわざ二冊（曰わく限定版や通常版らしいが）買うなどしていてやはり無駄遣いが多い。

基本的に掃除が苦手なせいで、日用雑貨など必要な物しか買わない俺としては、あの二人の買い物はよく分からない。まあ、そのせいで部屋が殺風景何だけどそれは置いておくとして……。

（しかし、どうしたもんかなあ）

赤の原因は分かっている。仕事が無いからだ。正確には仕事がないわけじゃないが、その仕事に金がならない。

今一番仕事の割合が大きい照井さんは払ってくれないし、佐々野さんの報酬だけでやりくりして行くには限度がある。

「依頼、来ないかなあ」

あるまじき発言とは思いつつも、言わずにはいられない。

正義の味方とプライドだけじゃ食べていけない。事務所で働くようになって分かった。

「リボルギャリーに企業の広告載せて、それに乗って登場。Wとアクセルにも宣伝用に何か着せて戦って貰って、それで広告料を……」

溜め息をつき、今後の金策について考えていると、遠慮混じりにドアが叩かれた。

「はい」

警戒のために腰にエイドマグナムを下げ、鍵とチェーンを外してドアを開けると、其処にはお隣に住む紀美さんがいた。

「紀美さん？お久しぶりです。どうしました？こんな夜更けに」

「えっと、確か藍川君。鳴海探偵事務所で働いてるのよね？」

「ええ。そうですけど」

「ちょっと依頼したいことがあるんだけど」

「……」

依頼人は来たけど、昔の知り合いはちょっと。そうってしまった俺は駄目な人間です。

すいません、翔太郎さん。

* * * * *

まつえ のりみ
松江紀美。

俺の住むボロアパート、そよかぜ荘の203号室に住んでいる松江家のお母さん。親が居らず、一人暮らしをしていた俺をよく気遣っていてくれた人。

とは言え、中学卒業と同時に働き始めてからは、ほとんど接点のよ

うな物がなかった。

そんな彼女が今回の依頼人である。

「行方不明？いつもの家出じゃないんですか？」

紀美さんが自宅に来た翌朝、俺は紀美さんと共に事務所に来ていた。紀美さんをいつも依頼人が座っているソファに案内した後、話をしている翔太郎さんと紀美さんの分のコーヒを淹れながら話を聞いていた俺は、その話にふと疑問を抱き、コーヒをテーブルに置きながら横から口を挟んだ。

「どういう意味だ、和哉」

と、翔太郎さん。同じく話を聞いていたフィリップさんも此方に視線を送っていた。

「えっと、松江……あ、今話題に上がっている息子の方ですよ。あいつ、結構な頻度で家出していたんですよ。まあ、たった数日で帰ってくるような、短い家出ごっこみたいなもんでしたが」

「随分と詳しいね」

「幼なじみなので。最近は疎遠でしたけど」

「……幼なじみとはなんだい？」

「えゝ!？」

バツと翔太郎の方を向くと翔太郎と目があった。

『どうしますか!？』

『何とか誤魔化せ！』

『了解！』

アイコンタクトでの会話。

この間、0.1秒。

「フィリップさん！」

「なんだい和哉？ 今から幼なじみについて検索しようと思っているんだけど」

「ちよつとお話があるのでガレージまで来て貰えませんか！」

一方的にそう告げて、俺はフィリップさんの腕をとって事務所からガレージへと移った。

*
 *
 *
 *
 *
 *
 *

「それで和哉。話とは？」

「え、えーとですね……。その……」

「無いなら、幼馴染について検索をしたいんだけど」

「……！！それだ！！」

「何がそれ、何だい？」

「幼馴染について！たまには検索じゃなくて、第三者の口から学ぶというのはどうでしょう！？」

「多少は興味深いね」

「でしょう！？ 言いだしたの俺ですし、良かったら俺が教えますよ
！！」

「……なるほど。なら、お願いしてみようかな」

「万事、了解ですよ！」

*
 *
 *
 *
 *
 *

数時間後。

ガレージの戸を開けて二人が戻つて来た時、何故か和哉は疲れた顔でフィリップは満足そうな顔をしていた。

「どうした、和哉？」

「ああ、翔太郎さん……。俺、頑張りましたよ？」

「たまには第三者に教えて貰うというのも悪くないね」

「……ああ、そう言う事か」

大方幼馴染について和哉が教え、それについて様々な事を質問でもされたのだろう。

「……所で翔太郎さん。紀美さんはどうしたんですか？」

「もう帰った」

「はあ！？ 帰しちゃたんですか！？ ちゃんと依頼料とかその手の金銭面の話はしたんでしょうね！？」

「和哉。男の仕事の8割は決断。後はおまけみてえなもんだ」

「そんなの知りません！！ いいですか！ 決断じゃ赤字は解消されません！！」

俺を指さして、和哉がそう怒鳴る。

あまりにらしくないので、しばし茫然としていた俺とフィリップはお互いに顔を見合わせ、代表するように俺が和哉に尋ねた。

「……そんなにヤバいのか？」

「俺の貯蓄を削ってだましました。俺は金を渡して働いていると考えても過言じゃないですよ」

「……」

「ちなみにそろそろ俺も辛いです。いくら安いとはいえ、家賃もありますし生活費とかその他諸々もありますから」

そうか、なるほどな……。

「依頼だ、フィリップ！ 和哉！ 気合入れるぞ！」

「そうだね翔太郎。今、僕は無性に仕事がしたいと思っていた所だよ」

「……いいですけどね。俺も気になりますし。それで？ 家出じゃなかったんですか？」

俺の言葉とフィリップの態度に呆れ顔を見せた和哉。それでも依頼と言うこともあるからか、すぐに表情を引き締めた。

「それについては俺も気になって聞いてみた。そうしたら」

.....

.....

.....

「ええ。藍川君の言うとおり、うちの息子の真志しんじは良く家出をしています。中学一年位からでしょうか。

家出と言ってもあまり遠くにいきませんでしたし、以前は藍川君と二人だった時もありました。彼が高校に行かず、疎遠になってからは基本的に一人だったんですけれど」

「それがどうして、今回は探してほしいと？」

「家出をしていても、こちらが電話をかければ電話は通じましたし、学校へも通っていたんです。

それなのに、今回は一週間経っても電話が通じず。学校にも行っていないようで」

「警察には？」

「行きました。けれど、日常茶飯事的に家出をしていたと話すと、今回もそれだろうと取り合ってもらえず。

お願いします、探偵さん。真志を、真志を見つけてください」

.....

.....

•
•
•
•
•
•

「そうだな。そういう場所があるなら、そういったところから探す方がいいだろう」

さらさらとメモ用紙に何か書き、それを俺に渡した。書いてあったのは風都の至る所の住所。此処が家出した時の行き先と言うのは容易に想像がついた。

「ああ、分かった」

翔太郎さんと別れ、松江が良く使っていた家出スポットを何箇所か回った後、俺はため息をひとつつきスタグフォンを取りだした。

「もしもし？委員長か？」

「もしかしくなくても小学校から中学卒業まで出席番号一番を取り続けた藍川ですよ」

『嘘、うわっ！ 久しぶり！ 元気だった！？』

「まあ、一応」

吾妻楓^{あづまかえで}。中学校三年間だけの付き合いで、当時は松江以外では唯一の友人だった同級生。委員長というあだ名から分かる通り、中学入学から三年間、ずっとクラスの委員長をやる様な、まじめな奴だった。

現状で俺が連絡を取れる唯一と言っているいい過去の知り合いである。

『でも、どうしたの？ 藍川君。連絡してくるなんて珍しいね？……もしかして初めて？』

「多分。それより委員長。松江の事は覚えてる？」

『松江君？ うん、同じクラスだよ。ここ暫く学校に来ていないみたいだけど』

「松江、学校で何かあった？」

俺がそう尋ねると、委員長は何故か言い淀んだ。

「委員長？」

『……中学生のころと変わって無い、かな。良くも悪くも』

「……そうかい」

背が小さく、内気だった事もあって、松江は小学校の頃から良く苛められていた。家出の原因も結構此処に起因する所はあったから、もしやとは思っていたが、その通りだったらしい。

『庇ってくれる藍川君が居なくなったから尚更ね』

「別に庇っていた訳じゃない」

『今のところは何も。俺も後一か所回るだけなので、翔太郎さんは先に事務所に戻っていてください』

「そうか。和哉、気をつけろよ」

『……はい。気をつけます』

ピ
ツ。
ツ
ー、
ツ
ー

*
*
*
*
*
*

スタックフォンをポケットに仕舞い直し、エイドスピーダーから降りて俺は大きく伸びをした。

「来るのは久々だな。一年……もつとかな」

松江の家での際、時々付き合つて一緒に夜の街に出る事があつたが、そういう時一番来ていたのはこの工場だった。

かなり古い場所で、あまり人が近づく事が無い。それなりに広いから隠れるにはもってこいだっだし、色々隠すのにも向いている。そして雨も防げる。事実俺がいない時も、松江はここを使用する頻度が一番高かったらしい。

「だから最後まで取っておいたんだけどな」

それなりに広い事もあって、探すのに時間がかかるから、他の場所を回る必要が無い最後に回したかった。

……というのはまあ、言い訳だ。本当は俺が探している間に他の場所に移動していて欲しいと、そう思ったから、最後に回した。

「委員長のあの話を聞いたら、もっと会いづらくなったぞ」

溜息を一つ。それから俺は工場の中に入って行った。

Yとの再会／昔の過ちとその清算（前書き）

10000文字突破了しました

「ま、つ、えー！藍川だー！！だから早く出てこいー！！」

……ジャリッ

「む？」

ふと背後から小石を踏みつけたような音が聞こえた。松江かと思い振り返るが、そこには誰も居ない。

再び背後で先ほどと似たような音が聞こえてきた。慌てて振り返るがやはり誰も居ない。

「そういうの出る場所だっけか？此処」

確かに出そうだけどさ……。不安になってきた。

再三の足音が聞こえ、振り返るが誰も居ない。正直な話、今すぐ回れ右して道交法もぶっちぎって即帰りたくなってきたがその感情を押さえ込み、数度深呼吸した。

「落ち着け、落ち着け」

呪文のように何度もそう呟く。そんな中、また足音が聞こえた。思い切り振り返ると、今までと違い、此方に向かって巨大な顎を開き、飛びかかってくる怪人がいた。

「うおおおお！？」

慌ててバックステップを踏むように体を動かした直後、数瞬前まで頭があった位置で顎が閉じ、前髪が数本、宙に舞った。

瞬時に状況を理解して、表情を引き締める。それから足を振り上げて突き出した巨大な顎を蹴りあげると、右手でエイドマグナムを持った。

「このっ」

そのまま、がら空きの胴体に弾丸を放ち、襲って来たドーパントを退けた。

まだ完治していない脇腹に痛みが走り、一旦銃撃を止める。退いたドーパントは、巨大だった顎が小さくなり、一般的なドーパントと似た外見となった。

犬とも狼ともつかない頭部。鋭い爪が輝く両腕と両足。体全体を茶色の毛が多い、ドッグドーパントなのかウルフドーパントなのかの判別はどうにも付かない。

「誰だ、あんた」

マグナムを向けたまま、ドーパントにそう尋ねるが、ドーパントの方は「ウウウ……」と威嚇するように唸るだけで、答える気配が無い。

（しかし厄介だな。さっきまでの足音は多分このドーパント。そう考えると速さはかなりの物。加えてあの爪に巨大化する顎）

実質的な火力がブレイズメモリのみてのは、非常に心許無い。とはいえ相手の速度を考えれば、よほどうまくカウンターをしない限り、ギジメモリによる特殊弾に効果は無いだろうという事も、今までの経験則からすぐに分かる。

ならば話は早かった。

『BLAZE!』

ポケットから取り出したブレイズメモリを起動し、そのままマグナムに叩き込むようにして挿入した。

「とりあえずこれで」

そうつぶやき、エイドマグナムから火弾を放つ。クイックドロウではなく単発で、恐らく相手のドーパントの脚力を考えれば、避けようと思えば簡単に避けられるように。

そして、ドーパントは思惑通りに火弾を避けた。続けて放つ弾丸も、やはり同じように避けて行く。

しかし近づこうとした際にはドーパントの足元へ弾丸を放ち、それ以上の進軍は許さない。

まるで嫌がらせのように体を狙った単純な攻撃と、進軍を許さない鋭い攻撃を続けるうちに、ドーパントの方が焦れ、無理に進軍をしようとし其処で足をめがけて弾丸が放たれた直後、高く跳躍して顎を巨大化。此方がけて飛びかかって来た。

それが俺の狙いだったと知っているかは分からないが、少なくとも狙っていた事ではあった。

『BLAZE! MAXIMUM DRIVE!』

銃身を伸ばし、マキシマムを発動させる。そして銃口を跳びかかってくるドーパントが開けている大口の中に向けた。

「ブレイズブラスター」

サッカーボール大の火弾がドーパントを襲い、その口内で炸裂する。そのまま先ほど跳んだ位置まで吹き飛んだが、やはりダメージが足りないらしく、メモリが強制排出されていない。ドーパントのままである。

「もう一撃か」

一度銃身を元に戻し、再び伸ばした。

『BLAZE！ MAXIMUM DRIVE！』

そして銃口を向け、ブレイズブラスターを放とうと引き金を引いた直後、ドーパントがまるでバク転するように動き、俺から距離を取った。放たれたブレイズブラスターはそのまま床へと辺り、派手に爆発して辺りを爆煙や砂塵が覆い、視界が完全に潰された。

思わず舌打ち。

「チッ、失敗した」

攻勢から一転。一気に不利な状況になってしまった。周囲を警戒しつつ、何時でもマグナムを向けられるように準備をするが、何時までも経っても先ほどのドーパントが襲いかかってくる気配が無い。

（逃げた？）

その内、爆煙や砂塵も晴れ、視界がクリアになり辺りを見渡すが、ドーパントの影も形もなかった。

「逃がしたか……。寧ろ助かったかも」

マグナムからメモリを抜き、ポケットにしまった。

二発のマキシマムに下手したら悪化したかもしれない脇腹を抑えながら、あれだけ派手な爆発音があったのに、松江が隠れ続けている事は無いだろうと考え、俺はその場を後にした。

*
*
*
*
*
*

流石に埃まみれのままで事務所に行くというのも落ち着かず、一度アパートの自室に寄ってシャワーと着替えをした後、部屋から出た所で紀美さんと鉢合わせた。買い物に行くところだろうか。その手にはエコバックがあった。

「あら、藍川君」

「……どうも、紀美さん」

なんか妙なタイミングで会ってしまったと、そんな風に思った。

(てか、事務所にもシャワーと着替えがあるんだから、そっちでシャワー浴びればよかった)

洗濯の手間を考えてこっちにしたけど、完全に外れだったらしい。

「あの、藍川君？何か分かったかしら、真志のこと」

「いえ。まだ何も。すいません」

「そう……。ごめんなさいね？ 少し前に依頼したばかりなのに、こ

んな急かすようなこと言っちゃって」

「いえ。……あの、聞いてもいいですか？」

多少の迷いはあった物の、意を決して俺は口を開いた。「なにかしら？」と尋ねる紀美さんに、多少逡巡しながらも、再び口を開く。

「松江の事なんですけど。居なくなる前、松江に何か変化はなかったですか？」

俺はシャワーを浴びながらあのウルフともドッグとも見えるドーパントの事を考えていた。内容としては単純で、誰があのドーパントに变身していたか。

あの場所は隠れ家としても使えるほど、人は寄りつかないし人気もない。だからこそ、あんな場所にドーパントが現れる事が解せなかった。

（可能性としてはいくつかある。元々あそこにて、侵入してきた俺を排除しようとした。初めて手に入れたメモリの性能を試す為に人気の無い場所にいた。あのメモリで既に何かしらの事件を起こし、あそこに身を隠していた。……あそこに俺が現れる事を知っていて、俺を殺す為に襲って来た）

他にも多々理由はあるが、一番確立として高いのは、元々あそこにあった、という可能性。そしてあそこに元々居るような人物には一人しか心当たりが無かった。

すなわち、松江真志だけである。

「変化？」

「性格が攻撃的になったとか、USBメモリのような物を持ってい

たとか。そういう変化です」

俺の言葉に紀美さんが言い淀む。これは当たり前だろうか？もしそうなら、なるべく翔太郎さんと一緒に行動した方がいいかもしれない。

そう考えていると、紀美さんが俺の目を真っ直ぐと見つめた。其処に浮かぶのは、憎悪だろうか。

「……そうね。君は、君で忙しかったもの、気がつかなくてもしょうがないのかしらね」

言葉ではそういう物の、目は「お前のせいで」とそう言っているように見えた。理由に全く心当たりは無い。

「真志はね。ここ暫く学校に通ってないの」

「……はい？それは聞きましたけど。行方不明になって一週間ほど、学校に通っていないんですよね？」

「違うの」

紀美さんが首を横に振る。

「半年。一年の中頃から学校へは通ってないわ」

「なっ!？」

耳を疑った。紀美さんはさらに言葉が続ける。

「中学の頃よりもしじめが激化してね。はじめの頃こそ、頑張っ
て通っていたのだけど、限界が来たみたいで。半年近く家を出てい
ないし、まともな食事もとっていないわ」

「……」

「だから貴方の言うような性格が攻撃的になったり、USBメモリのような物を持っているなんて事は間違いないと思うわ」

「……どうして」

こんな事を聞くのはお門違いとは分かりつつも、気が付いたら紀美さんに尋ねていた。

「どうして松江は、俺を頼ろうとしなかったんですか……？」

助けを求められて、助けられたかと言われれば分からない。だが昔のように松江をいじめたり、身の回りで何かをしようとしている連中を、目障りという理由だけで一方的に、絶对的に、暴力で沈めていた頃のように。何かしてやれる事があったかもしれないと、そう思うのに。

俺の言葉に紀美さんは少し驚いたような顔をした後、何故か嬉しそうにほほ笑んだ。

「君は変わって無いのね。あの頃と全然、変わっていなかったのね」「はい？」

そんなこと無いと思うのだが。

「あの子は一度だけ。たった一度だけ君を頼ろうとしたのよ？でも、あの子は見たの」

「何を、ですか？俺の何が、あいつの足を止めたんですか」

「あの探偵事務所の人たちと楽しそうに歩く貴方の姿」

たった一度だけ見られたらしい、俺の姿。なんて事は無い、探偵事務所の日常だ。

所長が先導。その後ろをどこか慌てた様子で翔太郎さんが追いかけて、その後ろを俺とフィリップさん。時々照井さんも一緒に歩く。なんて事は無い、いつも通りの姿。

「それを見て君はもうあの頃の君じゃないって思ったのね。だから、頼るのを止めた。一人で何とかしようとして」

「折れてしまった」

ええ、と紀美さんが首を縦に振った。

「まあ、確かにあいつの気持ちも分からんでもないですけど」

自分でも分かる。あの人達に会ってから俺は変わった。中学を卒業し、一日の大半をあの事務所で過ごすようになってからその変化は顕著だ。自分でも分かるほどのだから、それなりに長い時間を一緒にいた松江がそう思うのも無理は無いと思う。

「でもやっぱりあなたは変わってないわ。小さい頃から藍川君のお世話をしてきた私が言うんだから間違いない」

「そうでしょうか？」

「ええ。強いて言えば、素直になったって感じね」

素直……。

「藍川君。真志の事、見つけてあげて。きっと昔みたいに、貴方が迎えに来てくれる事を願っているはずだから」

「……分かりました」

素直に紀美さんの言葉に頷き、俺は事務所に戻ろうと紀美さんに背

を向け、階段へ向かおうとした。すると、何か思い出したのか、紀美さんが俺に声をかける。

「あ、ねえ、藍川君」

「なんでしょか？」

振りかえり、紀美さんの方を見た。

「ほら、中学校の頃に藍川君と真志と仲の良かった女の子がいたじゃない？ えーと、委員長ちゃん？」

「ええ、委員長です」

訂正する必要もなかったから、そのまま流した。

「あの子、良く家に来てくれてたんだけど、真志が居なくなる一月くらい前から急に来てくれなくなっちゃって。何か知ってるかしら？」

「……いいえ。何も」

「そう……。あの子、何か悩んでいたみたいだから、あの子の助けにもなってあげてね」

「……はい。必ず」

*
*
*
*
*
*

「え？高校、行かないの？」

「ああ。別に高校に行つてまでやりたい事も無いからな」

「そう……なんだ……。寂しくなるね」

「何でだよ、委員長。別に今生の別れて訳でも無いだろう？」

「そう、かな？ 本当に？」

「どうした、委員長？」

「あ、いや……。藍川君って、私のこと、委員長って呼ぶけど、でも私のことを委員長として見ないで、仕事を手伝ったり遊びに誘ってくれたことが嬉しかったっていうか……」ゴニヨゴニヨ

「良く分かんが……。あ、委員長。最後に一つだけ、お願いがあるんだけど」

「何？」

「松江のこと、お願いしたいんだ」

*
*
*
*
*
*

「フィリップさん！」

飛び込むように事務所の中に入ると、事務所の中にいた面々の視線が一瞬で集まった。しかしそんな事を気にかける暇はなく、俺の用事はフリーップさんにあった。

「何だい和哉？」

「検索をお願いしたいんですが」

「――！？和哉、何か分かったのか！？」

翔太郎さんが身を乗り出すように、俺に尋ねてきた。そしてフィリップさんは俺の勢いに何かを感じたのか、一つ頷くと両手を広げ、検索の為の姿勢になった。

「検索を始めよう。和哉、検索内容は？」

「『松江真志を誘拐した動機』。キーワードは『松江真志』」

少し間を空けた。それから二つ目のキーワード。

「『吾妻楓』」

「吾妻楓って誰だ？和哉」

「中学時代の俺と松江の共通の友人です。フィリップさん、次のキーワード。『風都高校』」

風都高校。松江と委員長が進学した高校だ。キーワードが近いかもしれないが、必要なもの。

再び間を空ける。

「『いじめ』」

逡巡して、必要と判断してキーワードとした。

「『ガイアメモリ』」

「なっ！？」

「多分、『ドッグ』」

「……本はかなり減った。でもまだ決定的な物が足りない。まだあ

るのかい？和哉」

「ラストは……俺自身。『藍川和哉』。それで足りないなら、『約束』もキーワードに」

「いや、和哉の名前だけで本が絞れたよ」

そう言ったフィリップさんはその手に持った無地の本を広げた。

「和哉。その様子なら、犯人の目星はついているのかな？」

「ええ、まあ。事務所に戻るまでに色々と思いましたから。やっぱり、委員長ですか？」

「ああ。君の知りたかった動機は君との約束」

⋮

踵を返し、事務所から飛び出す。行き先は既に決まっていた。

(委員長……。松江……)

二人のことを思うのは果たして何時以来か。

そんな事を思いながら、俺の足は確実にあの場所へ向かっていた。

*
*
*
*
*
*

「おい、和哉！」

「翔太郎。僕達も行くよ」

「……何？」

をつけてはしょっちゅう勉強しに来ていた物だったが。

少し懐かしく思いながら、俺はインターホンを二連続で押した。バタバタと家の中から足音が聞こえ、解錠の音の後、玄関が開いた。

「……覚えてたんだ。ちゃんと」

「二連続でインターホンを鳴らしたら、それは俺か松江だから直ぐ開ける。委員長が言ったんだろ？」

「上がって？お茶を煎れるから」

「知らないな。俺の目的は分かっているだろう、委員長？松江……いや、真志のこと、返して貰おうか」

「……」

俺の言葉に対し、委員長は何も言わない。

そのまま無言の時間が過ぎて、徐に委員長が口を開いた。

「駄目だよ。松江君を守るには、この方法が一番なんだから」

「そんな訳無いだろう！閉じ込めて自由を奪って！挙句に自分が番犬になるのが、最良だっていうのか！」

「そうだよ！力の無い私には、こうすることでしか果たせないの！」

「――ッ！！馬鹿か！俺との約束なんぞ、守る必要もないだろう！ああは言ったが、此処まで望んだ訳じゃない！」

「違う、違う！藍川君にとってはその程度でも、私にとっては違うの！」

覚えてる？私の事を委員長って呼ぶ人は沢山居た。居たけど、その中で私に仕事を押し付けるんじゃないくて、手伝ってくれた人は藍川君と松江君だけだった！！あの頃、友達って呼べた人たちは貴方達

だけだった！

だけど、藍川君は何でも一人でやって、私は助けられてばかりだった。だから、貴方との約束は！貴方の願いは！私にとっては何が何でも叶えなきゃいけないの！」

委員長の叫び。それが胸に刺さり、心臓のあたりに酷い痛みが走る。

あの頃の俺達の間係を、あの頃の俺は『友達がいな者同士が集まっただけ』とその程度で考えていた。彼女たちの事を友達と想った事もないし、正直助けたという考えもない。

松江は一对多で強ぶって見せているいじめっ子側が目障りだった。だから潰した。

委員長は大量の仕事を押し付けられ、自分の視界の中であたふたされて、やはり目障りだったから、早期解決の為に手伝った。

（ごめん、委員長）

全部自分の為だった。それ以上でもそれ以下でも無かった。でも、その行為が今、委員長を苦しめている。その事実が、たまらなく辛かった。

「それにね、藍川君。もう私、我慢できないんだ」

『DOG！』

「っ！？」

ガイアウィスパ―で気落ちしていた心が引き戻された。顔をあげる

と、ドッグメモリを自身の鎖骨辺りの生態コネクタにさしている委員長の姿。

そして、その姿がドッグドーパントに変わった。

『ウウウウウ………』

「……なあ、委員長。助ける、って言い方も何か違うけどさ。でもこれ以上委員長に罪を背負って欲しくないし、それに、君に言いたい事がある。だから」

『BLAZE!』

「ガイアメモリ。貴様は罪と共に燃え散れ」

『ガアアアア!!』

地を蹴り、這うような低い姿勢で此方に向かってくるドッグドーパント。そのドーパントの背にカウンターのように手を着け、馬跳びの要領で跳んで避けると、着地と同時に、振り向きざまにクイックドロウ。

その無防備な背中に火弾を叩き込むと、ドッグドーパントはそのまま吹き飛び、近くの民家の塀に激突した。しかし倒れることはなく、地面に足を着け此方を向くと、腰を落として構えた。

「流石に三度は無いか」

一度目は廃工場で、跳びかかったのに対して。二度目は今、突撃を去なして、後ろをとって。

二度とも自身の攻撃を利用されての攻撃となれば、ドッグドーパ

トも警戒するらしい。基本的に身体能力に差がある時は、相手を逆上させてカウンター狙いの戦い方をしているだけに、少し辛い。

「でも動かないと始まらないよな！」

向けたままのマグナムから火弾を放つ。が、それは避けられ、一気に距離が詰められた。

「っ」

ドスツと腹部に衝撃が襲う。殴られたと理解したのと痛みが走ったのは同時だった。

「がっ……はっ！このっ」

その腕を掴み、ゼロ距離で火弾を叩き込む。一発で終わらず、二発、三発と何発も叩き込み、最後に蹴り飛ばした。

「はあ……はあ……。これで終わりだ」

マキシマムを発動させる為、マグナムに手をかける。しかしそれよりも早く、ドッグドローパントが遠吠えした。

『アオオオオオオオオン！！！！！！』

すると顎だけに留まらず、腕や足、胴体等が巨大化していき、瞬く間に巨大なドローベルマンに見えないこともない犬、ビッグドッグに変身した。

「あー……変身すると抜け毛するのか？」

「ん？」

「え？……って、なんじやありやああああガッ！？」

「ドーパントか。……真倉刑事は気絶しているのか、ちようどいい」

「ACCEL！」

「変……身！」

＊真倉刑事はビッグドッグが跳ね上げたコンクリの塊が頭部に直撃して気絶しました。命に別状はありません

*
*
*
*
*
*
*

スピダーを全力で走らせながら、俺は思考を巡らせていた。サイドミラーには相変わらずビッグドッグの姿がある。

（速度を緩めたら追いつかれる。とは言ってもこの速度で片手運転。後ろ向いてマグナムなんて使ったら絶対にクラッシュするし）

いい方法が全く思いつかない。何をやろうと、何かする前にビッグ
 ドッグに潰されて喰われて血肉になるだろう。

(リボルギャリーが来るまで粘るしかないな)

それまで逃げきれるか不安ではあるが。こういう時、武器が一択と

言うのは、結構きつい。近接戦用の武器はやっぱり欲しい。無いわけではないが。

「藍川！」

「っ！照井さん！？」

照井さんの声が聞こえ、辺りを探すとバイクフォームの仮面ライダーアクセルが隣を併走していた。凄く乗り換えた気分だ。無理だけど。

「どういう状況だ！」

「半ば何時も通りですが、何時も以上にテンパっていたりします！」

ドーパントが姿を変え、時折巨大化するのは話には聞いていたけど、対峙するのは初めてだったりする。テラードーパントの時にあの頭が襲ってきたのは何か違うと思うし。

「そろそろリボルギャリーが来るとは思いますが、それまで何も出れないのが現状です！」

「なるほど。とりあえず今はあいつを引き連れつつ、安全な場所まで行くしかない訳だな」

「ええ、でも……来た様ですよ」

聞きなれたエンジン音が聞こえ、サイドミラーを見ると、ビッグドッグの前に割り込むようにしてリボルギャリーが曲がり角から飛び出してきた。

リボルギャリーはビッグドッグからさらに距離を離すと、俺とアクセルに並走し始めた。

『やあ、和哉』

ムを抜きながらバイクから降りた。

「さてと。翔太郎さんにばれたら怒られるだろうなあ」

そんな事を呟きながら、エイドマグナムに手をかけ、銃身を伸ばす。

『BLAZE！ MAXIMUM DRIVE！』

そして、弾丸を放つことなく銃身を元に戻し、再び伸ばす。

『BLAZE！ MAXIMUM DRIVE！ MAXIMUM DRIVE！ MAXIMUM DRIVE！ MAXIMUM DRIVE！ MAXIMUM DRIVE！』

その結果、狂ったようにマキシマムドライブと音声を繰り返し始めるエイドマグナム。ツインマキシマム。禁じ手の一つであり、フィリップさんからも絶対にやらないようにと釘まで刺された。

「なるほど……。確かにきついな」

燃えるような痛みが右腕を中心に襲ってくる。否、エイドマグナム本体は既に炎に包まれており、それを持っている右手もまた、炎に包まれていた。フィリップさんのグローブが無ければ、熱いだけじゃ済まないだろう。

「はぁ……はぁ……」

マグナムを持ち上げて行き、こちらに向かってくるビッグドッグに向ける。ビッグドッグは自身の周りを跳ぶWHMや走り回るアクセルに気を取られて気が付いていない。それどころかWとアクセルすら俺の方に気が付いていない。

「大丈夫……だよな？」

マグナムを完全に持ち上げ、しっかりとビッグドッグに向けた。その瞬間、俺を囲むように地面に藍色の炎の輪が出来、其処から銃口の先に向けて炎が飛び、弾丸を形成していく。

「って和哉！！お前！！」

『翔太郎！此処は危険だ！一度離れよう！』
「くっ」

半ば意識が飛びかけていて、体も重く、そして熱い。

(引き金を……)

Wとアクセルがビッグドッグから離れ、ビッグドッグがこちらに気が付き猛進してきた。

$$\left(\begin{array}{c} \text{引} \\ \text{く} \\ \vdots \\ \vdots \\ \vdots \end{array} \right)$$

カチツと音が鳴るとともに、炎の弾丸……否。炎の砲弾がエイドマ
グナムからビッグドッグに向けて放たれ、ビッグドッグの悲鳴の様
な咆哮と爆発音が聞こえてくる。其処で俺の意識は途切れた。

*
*
*
*
*
*

「和哉君」

「ん？ おお、委員ちよ、じゃなくて楓」

事件から三日後。ツインマキシマムの影響で見事に体がぼろぼろなものの、歩けない事もないからのんびり歩いて事務所に向かっていると、楓と出会った。

あの事件、最後のツインマキシマムは見事にドックメモリをブレイクし、楓をガイアメモリから解放した。さらに、楓の自宅にいた真志も無事に保護され、事件はめでたく解決した。

本来ならその後、楓がガイアメモリの所持や誘拐などで、色々面倒な事になるはずだったのだが、意外な事に真志が楓を庇ったらしい。

「僕が無理を言って、家に泊めて貰ってたんです！」

と照井さんや事件関係者にそう言ったそうだ。結果として真志と楓に嚴重注意と暫くの謹慎処分が言い渡され、事件は終了。

ちなみに依頼料も無事に払ってもらえて、赤字もぎりぎりで解消されて、ツインマキシマムの無断使用という事で、エイドマグナムを取り上げられたけど、そのせいで三日間制作に集中できて、結構満足というのは別の話だ。

「楓。謹慎処分だろうが。いいのか？出歩いて」

「あんまり良くないかも。でも、ちゃんと探偵さんにもお礼が言いたかったし、和哉君にもお礼、まだ言えてなかったから」

そう言うと、楓は俺の数歩先に進み、こちらに向かって頭を下げた。

「ありがとう。ごめんね、和哉君」

「う……。あー、でもまあ、俺がそもそもの発端でもあるんだし、

そう言うのは無しにしてくれ。寧ろ俺が謝るべきなんだ。すまん、楓。迷惑をかけた」

頭を下げる。そのまま無言の時間が続き、ふとクスクスと笑い声が聞こえた。顔をあげると、何故か楓が笑っている。理由が分からず、楓に尋ねた。

「どうした?」

「なんか、くすぐったいなって。和哉君って呼ぶことも、楓って呼ばれる事も」

「なんだそりゃ」

「……ねえ、和哉君」

「何だ?」

「私達、友達でいいんだよね?」

「……違う」

少し悩んでから、楓の言葉を否定すると、楓が驚いたような顔になり、泣きそうな顔に変わる。

そんな楓に微笑みかけながら、言葉を紡いだ。

「親友だ」

「……ううう、馬鹿!」

ゴスッ

「痛あつ!!?」

「うわ!ごめんね!?!和哉君!?!」

「この、楓!?!」

「キャー!?!」

そんな風に年相応にふざけ合いながら、楓と二人、事務所に向かい、ドアの前に立つ。

三日ぶりの事もあり、少し緊張しながらも、その戸に手をかけ、一気に解き放った。

「お久しぶりです！藍川和哉！只今戻り……」

「……」

「なんですか……。それ」

事務所の中には大切そうに見覚えの無いハードカバーの小説二冊を抱える翔太郎さんと、大量の小説や無駄に巨大な箱を傍らに積み上げて、それを読んでいるフィリップさんの姿。

……あれ、全部新しく買った物なら、もしかして黒字解消して赤字に逆戻りじゃないかな？

「か、和哉？お前、退院一週間後じゃなかったか？」

「……翔太郎さん。その小説、新しく買いましたね？しかも同じの二冊」

「初回版と通常版だってあ……」

「フィリップさん。それ、なんですか？」

「お、幼馴染についてやはり気になって検索をしてね？それで、幼馴染が出てくる本やゲームを……」

「……」

一度振り返り、ドアの外にいた楓にニコリと笑いかける。

「ちょーっと、待ってて貰えるか？」

「う、うん。寧ろ私、出直した方がいいよね？」

「ああ。そうして貰えると助かる」

「なら、そう言う事にしておいてあげましょう」

「なんで上から目線」

「それよりも藍川君。なんか、クーラーの調子が悪くて」

「修理屋さんを呼んで下さい」

「お願いします」

「……はぁ。今、新しい武器とガジェットとギジメモリを作っている、それが終わってからでいいのなら構いませんよ」

「何時頃終わるの？」

「そろそろかと。まあ、出来たら直しに行きますよ」

お騒がせR／鳴海探偵事務所のとある1日（前書き）

おまけ劇場なので前後編では無いです

鳴海探偵事務所のガレージ。本来ならフィリップさんの部屋のようにもなっているこの場所を、珍しく俺が一人で占拠していた。そんな俺の前には三つの代物。

コルク抜きのような持ち手の付いた鍵のような意匠の施された、刃渡り十五センチほどのナイフ。ネズミの絵が書いてあるギジメモリ。そして、一番労力を注いだといっても過言ではない、コードとホイールの付いていないPCのマウス。それぞれの名前をキーブレード、ラットメモリ、ラットマウス。

「回路の問題は無いし、プログラムも大丈夫の筈。これで後はギジメモリを挿してちゃんと動けば完璧」

生唾を飲み込み、ラットメモリとラットマウスを手にとった。

『RAT!』

そのままギジメモリ、ラットメモリをラットマウスに挿入すると、マウスのボタンの部分が開きネズミの耳のようになり、メモリの挿入部の反対側からしっぽのようなコードが出て、パツと見、ネズミのようにも見える。

「……成功か？」

一応起動はした。ガジェットとしての利用方法は潜入しての情報収集が主だが……。

「試して、みるか」

屈み、マウスを床に置く。マウスは俺に顔（というよりしっぽのあの逆側）の方を向けると、俺の方を見上げた。

「いいかい？ 今から事務所の方に行って、今の翔太郎さん達の会話を傍聴して来るんだ」

コクツと体を縦に揺らし、そのままラットマウスは床を走り、ガレージから事務所へと出て行った。

「さてと」

スタッグフォンを取り出し、決めておいたラットマウスと通信する為の番号を入力し、画面を見た。

画面には現在、メモリの挿入部の少し上についたラットマウスの小型カメラが見ている映像が映し出され、スピーカーからは同じくラットマウスの耳のようにも見える集音機が集めた音声が出てくる、筈だ。今はオフにしているから流れてこないが。

最初こそ少しずつ動いていたラットマウスが、その内停止し、少し上の方を見た。画面に翔太郎さん、フィリップさん、所長の声が映し出される。

（移動とカメラは良好。後は音声か）

少し息をのんでから、スタッグフォンにコードを入力して、ラットマウスの集音機をオンにした。

『――君! 翔太郎君!』

(お、所長の声だ。集音機も大丈夫みたいだな)

『おう、どうした、亜樹子』

『また和哉君を怒らせるようなこと、したんじゃないでしょうね!』

『急に何だ!?!』

『だって和哉君、ガレージに閉じこもってるし、フィリップ君、追い出されてるし』

『ああ、和哉はなんか新しいガジェットの追い込みがしたいからって、此处暫くずっと籠もってるんだよ』

『お陰で僕はこっちのソファで寝る羽目にね。でもそろそろ出来て、出てくる頃じゃないかな?』

『ふーん……ん?……キャー!! ネズミー!!』

『あん? うおお!?!』

(あ、気づかれた)

『落ち着きたまえ亜樹ちゃん。翔太郎。あれは恐らく和哉の作ったガジェットだ』

『キャー!! キャー!!!! キャー!!!!!!!!』

ドシャン！ガシャン！バリン！ギャーギャー！

「え、ええ……」

*
*
*
*
*
*

「ゴメンナサイ」

所長の手によりガレージから引きずり出された俺は、正座させられていた。俺の前には『天罰観面』と書かれたスリッパを手に、仁王立ちしている所長の姿。ガジェット制作でまさか天罰をくらうとは思わなかった。

「ふつ、まさかネズミを作っているとはね」

「まさか所長が大暴れするほどネズミが嫌いだったとは」

正座したまま辺りを見回して、溜め息を一つついた。部屋の中は机がひっくり返ったり、窓ガラスが割れていたり。惨憺たる状況だった。

現在は翔太郎さんとフィリップさんがせつせとお掃除している。

「なんであんな物作つたの！私の事を怖がらせたかったの！？」

「それは被害妄想ですよ。俺は純粋に」

「言い訳しない！」

「理不尽すぎる!!」

確定有罪らしい。情状酌量の余地くらいあってもいいと思うのだが、

それも無いのだろうか。

そんな事を思っていると、「でも亜樹ちゃん」とフィリップさんが助け舟を出してくれた。

「和哉は多分、ガジェットを試運転をしていたのだろう。それに亜樹ちゃんは今までに一度でも、和哉にネズミが苦手だと言った事があつたのかい？」

「それは……」

「不幸な事故だと思って、そろそろ和哉を許してあげてはどうだい？」

「うう……。いい、和哉君」

「はい」

「あのガジェット。ゼ——————ッタイに、私の前では使わないでね!!」

そんなに溜めるほど嫌なのか。

そんな事を思いながら、「はい、了解です」と俺は相槌を打った。壊せ、と言われなかっただけ、マシだと思おう。

「話が終わったなら、亜樹子、和哉。そろそろ掃除を手伝え」
「はい」

翔太郎さんの言葉に立ち上がり、俺と所長も掃除を手伝った。

数時間後。無事に掃除も終わり元通りの事務所になってから一息ついた。

ああ、掃除はやっぱり苦手だ。コキコキと首を鳴らしていると「そうだ、和哉」とフィリップさん。

「君の作ったガジェット、もっと良く見せてくれないかい？」

「あ、はい。いいですけど……」

ちらりと所長の方を見ると、既にそっぽを向いていた。

「早いですね」

「いいから！ 見せるなら早くしなよ！」

「では。えーと……あれ？」

そういえば。掃除中も見かけなかった気がする。そして。

「所長。窓ガラスを割った記憶は？」

「え？ 分からないけど……」

「……えーと」

スタックフォンを取り出す。再びラットマウスへ接続するコードを入力すると、ラットマウスはかなりの速度で移動中だった。ついでに聞こえてくる音声からして、恐らくいるのは……。

「外？」

どうしてこうなった。そう思わずにはいられなかった。

小さな体では広すぎる風都の街を、ラットマウスは懸命に走っていた。自身の創造主の手によって書かれたプログラムによって、その小さな体を懸命に動かして少しでも事務所から遠ざかろうとする。道行く人たちの間を走り、隠れられそうな場所を探して。ただ走り続けるのみ。

そしてその頃。同じく創造主である和哉も、風都の街の中を走っていた。片手にはスタックフォン。そのスタックフォンは、事務所で待機しているフィリップへとつながっていた。

『つまり、君の組んだプログラムは不完全だったと、こういう事かい？』

「不完全だった、というのとも少し違いますね。マウスラット自体は未完成でしたが、プログラム自体は不完全ではありません」

『どういう意味だい？』

「ラットマウスに入れるはずだったプログラムが10あったとしたら、俺はその内の9のプログラムしか入れていなかったんです。一つ一つのプログラムは独立しているので、未完成ですが、不完全ではありません」

『なるほど。それで？その君が入れていなかった1のプログラムと言うのは』

「現状のような逃走時の最終到着地点を設定する為の位置プログラム。まあ、簡単に言うなら帰巢本能に従って逃げる時の巢の場所の座標と言いますか」

『……つまり今のラットマウスは亜樹ちゃんや翔太郎、僕から逃げているというだけで、明確な場所に向かっている訳ではない、とそう言う事かい？』

「ええ。逃げているだけ。ラットマウスにとってはそれ以上でもそれ以下でもありません」

和哉のその言葉は、プログラムを組んだ本人だからこそ言える言葉だった。

「まあ、逆にそれが厄介なんですけどね。おかげで行動が読めない」

『全くだ。とりあえず僕は翔太郎や亜樹ちゃんからの情報が入り次第、検索をするよ。和哉も何か分かったり、思い出したりしたら教えてくれ』

「了解です。フィリップさん、またあとで」

スタックフォンを切ると、再びスタックフォンをラットマウスにつなぎ、画面を見る。ラットマウスが見ている映像が画面に流れるが、何を見ようとせず走っているからだろう。画面から何か情報を得ることは難しく、和哉は映像を見るのを止めるとスタックフォンを耳に当てた。

「……どこかの裏路地とかなのか？」

聞こえてくる街の喧騒がどこか遠く聞こえ、和哉はそんな事を呟いた。そのまま耳にスタックフォンをあてたまま、辺りを探索しながら道を急ぐ。

道を急ぎながら、和哉は自分で組んだプログラムの内容を思い返す。

しかし、先ほどフィリップに話した内容以上の事は思い出せず、八つ当たりのように乱暴に頭をかいていると、ふとスタッグフォンの向こうから聞こえてくる音声が静かになった。

（どこかの建物にでも入り込んだのか？……そういえば）

先ほどフィリップに言っていない事がある事を思い出した。言ってしまうえば簡単な事で、逃走をしているのだから隠れもすると、そう言う事である。何かの建物内に入り込んだという事はラットマウスは暫くそこに隠れるつもりだろうという事は簡単に予測できた。そう予測を立てると、和哉はスタッグフォンの向こうの状況を探ろうとさらに耳を傾ける。

（……静かな建物だな。でも無音で訳じゃなくて、人の話し声……。でも会話ってわけじゃない。一方的に語ってる感じ。それにどこで聞こえてくるカッカッって硬い物に何かぶついている感じの聞き覚えのある音は……）

その内、入れ替わる様にして聞こえていた話し声が一つのみになった。男の声。聞き覚えは無い。

『えー、であるからして、ここのthatは――』

（英語を教えている？……学校か！）

ラットマウスとの接続を切り、フィリップへとかけた。待機していたらしく、ワンコールで電話に応じたフィリップの声が、向こうから響く。

『どうしたんだい？和哉。何か分かったのかい？』

「ええ！フィリップさん、検索をお願いします！」

『分かった。和哉、検索の内容は？』

「内容は『ラットマウスの居場所』、キーワードは『学校』『英語』」

さらにキーワードとして今日の日付と今の時間を告げた。それから少しして、『当たり前だ、和哉』と電話の向こうからフィリップの声が聞こえてきた。

『今、この時間。英語の授業を行っている学校は一つしかない。それにそのクラスも同じく一つだ。恐らく、ラットマウスはそこにいる』

「場所は！？」

『風都高校。奇しくも君の友人たちの通っている、2年C組だ』

* * * * *

「……うーん」

p r r。 p r r。ピッ

「もしもし、翔太郎？」

『どうした、フィリップ。何か分かったのか？』

分かっている事とは言え、改めてつき付けられると、真志としては正直複雑な心境だった。それでも自分の親友が頑張っているから頑張ると決めたのだから、何とか少しでも理解しようと黒板の方に目を向けようとして、ある事に気がついた。廊下の方で授業中にもかかわらず足音がする。

自分だけでなく他の生徒達もその足音に気がつき廊下の方へと目をやり、その足音はこの教室の前あたりで止まる。そして次の瞬間にその戸が開け放たれた。

学校であるにもかかわらず、制服に身を包んでおらず、教室内を見渡してから何やら無骨な携帯を耳に当てた大変に見覚えのある少年。その姿を真志だけでなくクラスの大半の人間が知っていた。

何故彼がここに。誰もがそう思い、あまりにも堂々とし過ぎていて教師ですら動けずにいる中、代表して真志が声をかけた。

「か、和哉？」

「ん？ おお、真志か。ちょっと待ってくれ。……すまん真志、もう一度声を出して」

「え？」

「……あー、なるほど。其処か」

そう言うと、和哉は堂々と教室へ入り、掃除用具入れと壁の隙間を掃除用具入れを動かすことで無理矢理広げると、其処に手を突っ込み何かを取りだした。

パッと見ネズミにも見えるそれを見た女生徒が多いに引く中、和哉はそれについたほこりを丁寧に払うと、メモリを抜いてから本体とメモリをそれぞれポケットへとしまう。

「ミッションコンプリート。ああ、疲れた」

コキコキと首を鳴らしながらその場で翻ると、和哉はそのまま教室から出て行つた。そして完全に外に出る前にもう一度教室の方を見て、茫然としていた教師へと向き直り深々と頭を下げる。

「すいません。授業の邪魔をしてしまって」

それから真志へと目を移すと、真志へと手を振った。

「じゃあな、真志。また」

楽しそうにそう笑って、和哉は教室から出て行った。

余談ではあるが、この事が原因で真志がまだ和哉と付き合いがある事が分かり、中学時代の恐怖を思い出したのか、真志に対してのいじめが無くなった。

*
 *
 *
 *
 *
 *

「和哉！」

「あ、翔太郎さん。無事に回収出来ましたよ」

「それはいいけどよ……。お前、どうやって回収してきた？」

「堂々と教室に乗り込んでいきました」

「あほか！」

ガンッ

「痛っ!？」

「ったく、一つの事に集中したら、他に見えないのか!」

「貴方に言われたくないですが……。すみません」

「全く」

* * * * *

Aの予告／with A

「すみません、所長」

「絶対に私の前では使わないでね!」

「はい。また暴れられたらたまりませんし」

「誰のせいよ!」

「今回は不幸な事故かと」

「……あれ?そんな気がする」

「それより所長。ラットマウスについて、詳しく知りたくはありませんか?」

「ううん、そこまで知りたくないかも。ネズミ苦手だし」

「そんなこと言わずに。今なら俺のプロフィール付きです」

「誰得すぎない!?!」

Gの襲来／ゴキブリじゃないよ！

ごまだれ（以下G） 「自分で言っていてむなしいな」

藍川和哉（以下A） 「喰らえ」 殺虫剤噴射

G 「何するか！？」

A 「いきなり現れたから」

G 「ひどいな！？」

A 「で？何故現れた」

G 「キャラ紹介と武器などの紹介をば」

A 「以下、フリップでどうぞ」

藍川^{あいかわ} 和哉^{かずや}

年齢17。性別男。身長175cmで体重64kg。鳴海探偵事務所の助手兼探偵見習い。一応探偵見習いと名乗ってはいるが、探偵になるつもりは殆ど無い。

基本的に優しい性格で人を放っておけない性格。昔は素直ではなかった為、何かしら自分本位の理由付けをしていて、自身もそれを信じて疑っていないが、今はその性格のせいもあり探偵業で無茶をする事がしょっちゅう。

でも金銭が絡むとその性格はどこへやら。普通に怒るし、普通に脅す。曰く「正義の味方とプライドじゃ飯は食べられません」とのこ

と。

ある事をきっかけに幼い頃から鍛えている為、身体能力などは人並み以上。さらに射撃の腕も高く、武器さえあれば生身でドーパントに立ち向かい、勝利を収めるほど。特技は早撃ちで最大五発まで発砲可能。加えて、メモリの入れ替えなどをスムーズに行う為、基本的に右手でしかエイドマグナムを持たない。その為、右腕を中心に体かなりの負荷がかかっている筈なのだが、本人は平然としている。生身でツインマキシマムを使い、その三日後には普通に生活している所を見れば、本人の体が鍛えている以外に実は何かあるのではと思えてならない。

幼少時は風都に住んでいたが、一時期風都を離れ別の街に住んでいた。戻って来たのは小学四年。その頃から一人暮らしで、隣に住む松江家とはその頃からの付き合い。

基本装備

『エイドマグナム』

トリガーマグナム同様のエネルギー銃。ガイアメモリ・メモリガジェットのプログラムをエネルギー弾に転換・発射する機構を備えている。メモリを使わなければ通常弾であり、ブレイズメモリを使用すると高威力の火弾を放つ事が出来る。それ以外はトリガーマグナムと基本的に同じ。マキシマムドライブを発動時は、銃身を伸ばしインサートされているメモリをマグナム本体に収納する形で発動する。

『キーブレード』

コルク抜きにも見える鍵の意匠の付いた刃渡り十五センチ程のナイフ。イメージとしては職・殺の蜘蛛の糸。てかまんまである。ガイアメモリ、ギジメモリ

のプログラムに応じて刃
を変質させることが可能で、ブレイズメモリをインサートしている
時には刃渡り三十センチ
程の藍色の炎の刃、キーマモリでは鍵穴に合わせて刃の形が鍵に変
わる。マキシマムドライ
ブ発動時は、インサートされているメモリをそのまま90度回転さ
せる事で発動する。

メモリガジェット

『ラットマウス』

全長…55mm (マウスモード)、80mm (ライブモード・
尻尾まで含める)

全幅…30mm (マウスモード)、30mm (ライブモード)
全高…12.5mm (マウスモード)

最高歩行速度…50km/h

ラットメモリを挿入するとラット型のライブモードになる白を基調
としたマウス型ガジェット。こう書くと非常に分かり辛いですが、PC
に使われるマウスである。通常のマウスとしての機能は勿論使える
が、他のガジェットのように武器としては使えない。最高歩行速度
は各ガジェットの中で最速を誇っており、その小柄な体と素早さか
ら、敵地への侵入と偵察等が主な仕事。

ライブモード時にはメモリ挿入口の反対側から、尻尾のように伸び
ている物はスパイダーショックに内蔵されているマイクロワイヤー
と同じものであり、これを使って物を運んだり、またPC等に接続
中のデータを記録したりなどラットマウスの半ば生命線のような物。
マキシマムドライブはルナメモリを挿入しての、大量分身しての体
当たり。ただ、威力は全然の為、主に目くらまし要因。

また偵察以外にもう一つの使い方があったりするのだが、翔太郎や
フィリップにばれたら怒られる為、なるべく使わない。少なくとも

周りに誰かいるタイミングで使ったら怒られる。

エイドスピーダー

全長2.00m

全幅0.68m

全高1.12m

重量164kg

最高速度550km/h

最高出力260.0kw

ベース車種 ホンダ・CBR1000RR

和哉の乗っているバイク。名付け親は翔太郎。元々和哉のバイクをフィリップがチューンアップしたものであり、車体カラーは藍色。車体の横には炎のようなAの文字があり、またハードボイルダーのように前後で分離も可能。その為、ボイルダーユニットの換装も可能である。

自動操縦機能は残念ながら搭載していないが、基本片手発砲の和哉としては其処まで問題は無い。武装は皆無だが、マキシマムスロットは装備されており、行おうと思えばブレイズメモリを挿入、炎を纏っての体当たりも可能であったりする

G「凄く適当に終わらせたな!？」

A「こんなもんだろう。キャラ紹介なんて」

G「ええ……」

Aの予告／withG

A「はい、じゃあ、予告よろ」

G「本当に投げやりな!？」

A「だって知らんし。次回もいつも通りだあ」

G「うん。いつも通り事件に巻き込まれて、ひーこら言うといいさ」

A「おい」

G「だがまあ、今回は事件に巻き込まれない!」

A「な、なんだってー!？」

G「次回、Kの襲来／VSライダー」

A「うわあ、めんどくさそう」

人間の方は白いシャツに藍色のジャケット。黒のジーンズを履いていて、その腰には日本には不釣り合いな拳銃のホルスターのついたベルトと一丁の藍色の大型銃を下げている。今はその手にコルク抜きのような取っ手の付いた刃を振るっている、その名を藍川和哉。

ガンッと一際大きな音をたて、和哉とインフィニティはお互いに距離を開けると、和哉はコルク抜きのような刃、キーブレードを持った左腕を下げてしまい、構えない。一方のインフィニティは右腕の刃を前に出し、正眼の構えを取る。

「もう少しでお前らの本拠地かもしれない場所が分かったってのに。王自ら出陣とはな」

『我が王国はまだまだ脆弱なものでな。貴様と戦えるレベルも限られている』

「そうかよ。なら、Wなら楽勝って事だな。いい事を聞いた。なら、此処でお前を倒して、本拠地の場所を教えて貰うとしよう」

『やれるものなら、やってみるといい。銃士よ』

言葉が終わるとほぼ同時にインフィニティが地面を蹴った。和哉は迎え撃つ事を選び、開いている右手にメモリを持ち、起動させる。

『BLAZE!』

そのままキーブレードに叩きこむようにインサートすると、刃の部分が燃え上がり、藍色の炎の刃を纏う。そして近づいたドーパントが右腕の刃を振るうと同時に、和哉もまた、キーブレードを振り、ガンッとひととき大きな音をたて、そのまま鏑迫り合いを始めた。

『以前と変わらないな銃士。本当に人間か?』

「生物分類学上はな!!」

右手でエイドマグナムを抜き、そのままクイックドロウ。予想していなかったのか、その衝撃にインフィニティは怯み、そのまま吹き飛ぶ。

『グッ!?』

「ラスト!これで決める!」

『BLAZE! MAXIMUM DRIVE!』

「ブレイズスラッシャー!! セイヤアアアアア!!!!」

キーブレードが纏っていた藍色の炎の剣が巨大化し、その刃をそのまま横薙ぎに振った。インフィニティはようやく立ち上がったが時すでに遅く、刃が届く。和哉もインフィニティもそう思ったが、しかし刃はインフィニティに届く前に、何かに阻まれた。

「な!?!」

つい数瞬前までは無かった銀色のオーロラ。それが和哉とインフィニティの間に突如として現れたのだ。和哉のブレイズスラッシャーはそのオーロラにより阻まれ、インフィニティは立ち上がると、自身のロストドライバーからメモリを引きぬいた。

『……目的は果たしたか。銃士!勝負は預けよう!』

「あ、待ちやがれ！逃げんな！」

インフィニティを中心に強風が吹き、仮面ライダーの姿から人間の姿に戻ると、男はそのままどこかへと走り去った。和哉はその姿を見ようとするが、銀色のオーロラ越しでは男の背丈等は分かって、顔やどんな服装かなどはまったくつかめない。歯ぎしりをして、その男を追おうと、和哉はキープレードを仕舞ってオーロラに向かって走るが、そのオーロラから男が一人現れた。

その場で慌てて止まると、和哉はエイドマグナムを抜き放ち、その男へと向ける。男はそんな和哉に対し、同じように銃を向けた。

「誰だお前。Infinityの仲間か」

「僕の名前は海東大樹。トレジャーハンターさ」

「トレジャーハンター？」

「そう。そしてこの世界での僕の狙いは君の持つエイドマグナムだ」

「……大体分かった。ようは泥棒って訳だな」

「トレジャーハンターだ。泥棒何かと一緒にしないでくれたまえ」

「似たようなもんだろうが」

和哉が大樹とそんなやり取りをしている間に、銀色のオーロラが消えた。その向こうにドーパントだった男の姿は無く、和哉は片手でポケットからラットマウスとラットメモリを取り出すと、片手で器用にメモリを起動し、ラットマウスにインサートした。

『RAT』

「無駄かも知れんが、さっきのドーパントに変身していた男を探してくれ。見つけたら連絡。そのまま尾行。見つかったらいつも通り。いいな？」

ライブモードに変形したラットマウスが、和哉の言葉に頷くと、その手から降りてどこかへと走って行く。新たにブレイズメモリを手にとると、そのメモリも起動した。

『BLAZE!』

「さて、大人しく諦めるならそれでよし。力づくって言うなら、分かってるよな？」

「なら、試してみるかい？」

「上等だ！」

ブレイズメモリをインサートして、そのままエイドマグナムを発砲する。迫る火弾に対して、大樹は自身の銃、ディエンドライバーにカードを一枚挿入し銃身を伸ばす。

『KAMENRIDE』

その銃口を火弾へ向け、言葉と共に引き金を引く。

「変身」

『DI—END』

それと同時に、複数のディエンドの虚像が大樹に重なる様に動き、更に十枚のライドプレートが火弾を全て粉碎し、ブーメランのように大樹の元まで戻ると、それらすべてが顔に刺さり、鎧の色をシアン色へと変化させた。

「……仮面ライダー、ディエンド。ディケイドの仲間か？」

「ああ、そうさ。でもトレジャーハンター仲間って訳ではないけどね」

「だろうな」

エイドマグナムを向けたまま、左手をポケットへ入れ、その中のギジメモリに触れる。

（ちゃんとある。なら問題ない）

そして一息ついたのち、ディエンドと和哉は同時に弾丸を放ち、それを追いかけるようにして一気に距離を詰めんと弾丸を放ちながら、走り始めた。

「遅すぎる」

「……やれやれ、翔太郎。また和哉に電話かい？十分前にかけたば

かりだろう」

「ぐっ」

「まあでも。確かに遅いね。いつもなら連絡の一つでもあっておかしくないものだけど」

「だろ!？」

「でも君はかけ過ぎだね」

「……最後の一回だ」

p r r。 p r r。ピッ

「あ、おい、かず——」

『この番号は、現在、電波の届かない所、もしくは携帯の電源が入っておりませ』

ピッ。

「どうしたんだい、翔太郎？」

「フィリップ。和哉を探しに行つて来る」

「何故だい？」

「そもそも電話が通じなくなってる。こんな事、普段なら無いからな。行つて来る」

「あ、翔太郎！……何処を探すつもりなんだろうね？」

和哉VSディエンド。和哉の所有するエイドマグナムをめぐっての戦闘は、序盤こそ銃の撃ち合いと近距離での格闘戦を主流とし、ほぼ互角と言っている戦いではあった。

「がつ」

そして和哉のように数度横回転してから立ち上がり、その手にカードを二枚持った。

KAMENRI DE
DRAKE
ZORUDA

と腰を落とす。

「次から次へと。厄介な」

『既に5体の仮面ライダーを倒した人間の台詞とは思えないね』

最初に召喚されたライオトルーパー三人は火弾と体術のみで。次に銃には剣というディエンドの考えから召喚された仮面ライダーサソードと仮面ライダーサガも、スタッグフォンという犠牲を払いながらも、エイドマグナムのマキシマムドライブをきっちり当てて撃破していた。

ディエンドのみの時を加えると、実質四戦目にもなる和哉の対ライダー戦。その火蓋を切って落としたのはドレイクとゾルダのそれぞれの武器。ドレイクゼクターとマグナバイザーの銃声だった。

「ちっ」

舌打ちと共にその場から横に跳び、そのままドレイクとゾルダに向けてマグナムを発砲する。弾丸の直撃で二人のライダーは怯むが、しかしカメンライドカードで召喚されたライダーは人形と等しく、それでダメージを蓄積した所で、人間同様に動きが鈍くなったりする訳でもない。

此処までライオトルーパーやサソード、サガとの戦闘でその辺りの特徴もまた、和哉は理解していた。その為、時々射撃をしつつ銃口を向けられそうになれば、直ぐにその場を離れると言った、和哉なりの対遠距離攻撃戦用の行動をしつつ、和哉はマグナムをドレイクとゾルダの足元に向けて発砲した。

火弾はそのまま地面へ当たり、爆発。辺りを粉塵が舞い、サソードとゾルダ、ディエンドの視界を閉ざし、和哉の身を隠した。消えた和哉を探そうとドレイクとゾルダが辺りを探る中、粉塵の向こうか

ダーショックとブレイズメモリを回収し、両方ともポケットへと仕舞う。

（すまん。無茶させる）

心中でスパイダーショックにそう謝罪しつつ、和哉は痛むから右手でなく左手でエイドマグナムを持った。その銃口をディエンドへと向けると、ディエンドは再びカードを手に持った。それをディエンドライバーへ入れ、発動する。

『ATTACK RIDE ILLUSION』

音声と共にディエンドが和哉を取り囲むようにして三人に増える。

「おいおい、そんな事も出来るのかよ」

どこかげんなりした様子の和哉。そろそろ限界に近い事を自覚していか、舌打ちを一つすると、和哉はエイドマグナムを上空へ放り投げた。そのエイドマグナムを六人のディエンド全員が反射的に目で追う中、和哉が手に持った物は再びキープレード。そしてスパイダーメモリ。

『SPIDER』

「ギリギリ全員。範囲内！」

和哉がキープレードを振ると、その刃が伸びた。その刃を鞭のように動かし、ディエンドの一人へ向ける。刃はそのままディエンドへ当たったが火花が散る事は無く、何故か刃はディエンドの体にぴたりと張り付き、離れない。

『なっ』

「どっ、せえええい!!」

そのまま片手でキープレードを振るい、刃が張り付いているディエンドを別のディエンドへとぶつけた。そのディエンドにも刃が付き、二人のディエンドを拘束する中、和哉が自身の後ろに立つ残る一人を撃ち倒す為、振り返りながら落下してくるエイドマグナムをその手に取ろうと手を空中へ掲げた直後、銃声が響いた。

振り返った和哉の後方から放たれた弾丸は見事にエイドマグナムに当たり、エイドマグナムを最後のディエンドの方へ弾き飛ばす。弾き飛ばされたエイドマグナムが最後のディエンドの手に収まると、キープレードで拘束されていたディエンド二人がその姿を消した。

「返せっ!」

和哉はそのままキープレードをディエンドの手にあるエイドマグナムに向けた。

しかし事前にディエンドライバーに一枚のカードを入れていたらしく、ディエンドはディエンドライバーの銃身を伸ばし、カードを発動した。

『ATTACK RIDE INVISIBLE』

「エイドマグナム。確かに貰ったよ」

その言葉を最後にディエンドが姿を消し、キープレードが空を切る。周囲を探すが当然その姿は無く、和哉の手元にデンデンセンサーが存在しない現状、ディエンドを追う事は出来ない。

（くそっ。一旦家に帰って、デندنセンサーと予備のスタックフオンを回収して。それからスタックフオンでラットマウスを帰還させ、エイドマグナムの元へ案内させる。エイドマグナムにも一応いざという時の為に発信機を付けているから、ラットマウスさえ手元に戻れば、あの海東と名乗った男を探せる）

「絶対に、取り戻す」

「家にもいないのか。和哉、何処に行ってるんだ？」

「どうした？　フィリップ」

「……悪い方から頼む」

脱獄したらしい。もしかしたら、和哉を狙うかもしれない』

「それなら、尚の事急いで和哉を探さないとな」

『そして良い知らせだけど』

「ああ」

『今、その藤岡淳士関係でうちの事務所に依頼人が来ているよ。早く戻って来たまえ』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1666v/>

仮面ライダーW ～罪を燃やすB～

2011年10月7日14時27分発行